札幌同窓會第五十二回報告

昭和六年三月

札幌同窓會

目次

○故人略傳、寫眞……

内村鑑三君、佐藤辰三郎君、和田太吉君、平野多喜松君、目黒末之丞君、相馬經治君、江刺家弟君、高木直一君、山口正三君、竹江重郎君、石塚吉郎君、澤田正見君、牧野要三君

○札幌新入會員歡迎寫眞……

○本會記事……一

昭和五年總會記事、昭和六年總會記事、昭和五年新會員招待會、弔詞弔電發送、ヒーバート・ライマン・クラーク氏よりカイリアム・エス・クラーク胸像謝狀、年賀芳名、實業學校長同人懇親會記事、河村九淵氏より通信、各地通信

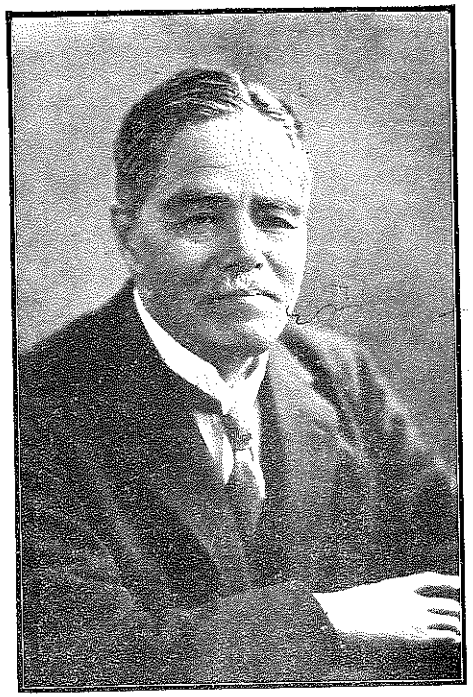
○豪灣支會記事……二五

○卒業生府縣別人員調……二六

○會員住所異同　會員死亡者……二九

○會計幹事より廣告　庶務幹事より廣告……三一

○札幌同窓會規則……三三



故内村鑑三君

故内村鑑三君小傳

宮部金吾

基督教界の偉人内村鑑三君は昭和五年三月二十八日午前八時五十一分眠るが如く安らかに其靈を神の御手に委ねられました。行年七十歳。熟々君の波瀾に富める貴き生涯を顧るに、神は躍め「我爾を人を漁る者と爲さん」との聖旨に由り君を選び給ひし跡を明らかに見る事が出來るのであります。神はこの爲に君を札幌へ導き、米國に遣はし、所謂不敬事件をすら惹起せしめ、あらゆる辛苦困難を具さに嘗めしめ、鍛へに鍛へられ、遂に君をして、獨立獨歩、文筆と講壇より純福音の宣傳を爲さしめ、且つ確乎たる日本的獨立基督教の基礎を築かしめ、未來ある榮光の偉業を遺さしめたのであります。

内村君は舊上州高崎の藩士内村謹之丞宜之氏の長男として、文久元年（一八六一年）三月二十四日に、江戸小石川鳶坂上の（今の本郷區眞砂町）松平右京亮邸内に生れました。嚴父は謹直高邁の士にて儒教に通曉し、藩に在つては家老の職を勤められました。慈母ヤソ子は同藩士大戸家より嫁し、勤勉にして誠實なる貞女であつて宜之氏との間に君を頭として五男一女を擧げられました。

君はかくて江戸に生まれて間もなく故郷の高崎に移り、其處に生ひ立つて寺小屋式の小學校に通學しました。父君が漢學に造詣深かつた關係上、日夜嚴しく漢文の素讀を強要されました。斯くて十一二才の頃迄溫き父母の膝下に在つて嚴格なる儒教的訓練を受けたのであります。

明治五年頃上京して私立の英學塾に入り專心英學を修め、明治七年三月に東京外國語學校（同年十二月東

京英語學校と改正）の入學試驗に合格し、英語學下等第四級に編入されました。これを思ひますと當時既に英語に對する素養が相當培はれてゐたものと見ゐます。尙當時の一覽を見るに、同級生中に末松謙澄、野村龍太郎、高木甚平、山本悟三郎、田中稻城、岩川友太郎諸氏の名前が並んで居ます。若し君が斯くして順調に學業に就いて行く事が出來ましたなら、吾々より數年前の先輩として、札幌へ來る機會は或ひは遙に與へられなかつたでありませう。然るに君は幸か不幸か肺患に罹り一年有餘の休學を餘儀なくされました。

明治十年、君が東京英語學校の第一級に在學中、偶々札幌農學校の官費生募集の勸誘がありまして、それに應じた者が十一名ありました、其內に內村鑑三、太田（新渡戸）稻造、岩崎行親、足立元太郎、高木玉太郎、佐久間信恭、藤田九三郎等の諸氏があり、是に宮部も加はりましたが、又工部大學豫科からも廣井勇、南鷹次郎、町村金彌等の諸氏應募され、合せて十八名の者が札幌農學校第二期生を編成する事になりました。

內村君の嚴父は君に法學を修むるやうに切に說き勸められました爲め、一時は法科大學に入學する決心を起されたのでありましたが、熟々自ら省るに、到底法律を以て立つべき性質でない事を感じられて居たので、ありました。折しも札幌農學校生徒の募集に遭遇し、北海道の拓殖これ我が任務なりと深く心に決する所があり、父の許を得て直ちに應募されました。

札幌農學校に入學を志してからは、未だ東京に居る間より、特に內村、新渡戸兩君と私との三人は、最も親密の交際を致しました。斯くして札幌に於ける學生々活中、三人は始終行動を共にしました。其上內村君と私とは若き四年の日を寄宿舍で室を同じうして居つたので互の性質はよく知り盡して居ます。君は武士氣質（かたぎ）で、正直で、敬虔で、凡帳面な所があり、友情に富み、又友人の忠告をよく受入れる雅量を持つてゐました。然し又一方に甚だ烈しい性質があつて、多くの人々と衝突喧嘩もしましたが、不思議の事には同室に居つたにも係らず、私とは一度も喧嘩をした事がありませんでした。又世事慣れず、一見粗野な處があつたので「不意氣」といふ綽名を附けられても居ました。

內村君は頭腦明晰で其學才記憶力に就いては驚く可きものがありました。勉强も規則正しく、其努力も人一倍でありましたが、試驗の成績を見るに製圖と兵式體操を除く外は殆ど各學科に亘り最高點を取らないものは無かつた程で、恐らく札幌農學校開始以來內村君程最優等の成績を取つた者は他に一人もあるまいと思ひます。それは君の平素の心掛が良かつたからで、何時準備勉强をするかは同室の私にも判らぬ位でありましたが、試驗の一週間前には總ての準備が整ひ、俄勉强の如きは決してされませんでした。この習慣、即ち「規則正しい勉强」と「豫め準備をして置く」といふ事は內村君の一生を通じて常に變らずに保たれたものであります。君の主宰されてゐた月刊の「聖書之研究」雜誌が三十年間一回の遲延も無く續いて發行されてゐたのは常に三四ヶ月分の原稿が前以て整へられてあつたが爲であります。

入學當時、內村君は十七才、新渡戸君と廣井君とは十六才、私は十八才で概して第二期生には年少者が多く、中々皆アンビシアスでありました。在學中に夫々或特別の學科を選んで、學業の餘暇に其研究に努めて居ましたが、內村君は動物學を選び、特に水產學に興味を持たれて居ました。卒業式の演說に、內村君は邦語で「漁業も亦學術の一なり」との題下に滔々と其識見を述べられました。「水產學は丁度農學に於けるが如く一つの科學として發達せねばならぬ。日本の如く水產物に富める國では其研究を忽にすべきでない」と力說されました。當時未だ幼稚なりし水產界の趨勢に對し、實に時勢に先んじたる卓見と言ふべきであります。

而して實にこの農學校在學中に君は基督信徒となられたのでありまして、君が如何にして基督信徒になつたかを知るは君の生涯を記述するに當り、最も必要にして且重大なる事柄であります。尤も其事に就いては君の著書 "How I Became a Christian" に委しく書いてあります。明治十年九月三日に吾々が札幌に着き、農學校の寄宿舍に入つた時には、上級生中に基督教信仰の熱が燃ゆて居たといふ事など誰一人知つて居た者は無かつたのでした。第一期生はクラーク先生の感化誘導に依つて聖書を學び信仰を起し、丁度吾々が札幌へ着く前日に一同美以教會の宣教師エム、シー、ハリス氏より洗禮を受け、傳道心に燃ゆて居つた折でありました。思へば吾々は急に、燃ゆる聖火の中に飛込んだやうなものでありました。始めは基督教に反對した人も多數ありまして、内村君も其一人でありました。君が當時未だ草深かりし札幌神社の社頭に額づきて、此邪教を愛する國より追拂ひ給へと祈願された由を、晩年に至る迄人に語られたものであります。併し第一期生の内、特に大島正健君、伊藤一隆君等は非常なる熱心を以て、私共を日曜の夜の集會や或は祈禱會に導き、うるさい程に引出しに來られ、吾々は已むを得ずして集會に出た樣な次第でありました。入校後間もなく教頭ウヰリヤム、ホイラー教師より禁酒禁煙の誓約書に有志の者は署名するやう勸誘されました。之れには、ホイラー、ペンハロー、ブルックスの三教師が既に署名されて居たので全級十八名の者は悉く之に署名して誓ひました。又ホイラー教師は豫てクラーク先生が來朝の節横濱にて購入して來られたといふ英文聖書五十冊の内より一冊づゝを私共に分配されました。上級生の熱心なる誘導の結果として、私共十八名の内十五名は其年内に、即ち僅か三四ヶ月の間に、クラーク先生の歸國に先立ち書殘された「イエスを信ずる者の誓約」に署名し、クリスチヤンとなる事を誓ひました。これは一種の群集心理に基いた處もあつた樣でしたが、そこに確かに上よりの不思議な力の働きがありました。併しこの十五名の内僅かに七名だけが踏み留まつて、翌十一年六月二日にハリス師より洗禮を受けました。その人々といふのは足立元太郎、藤田九三郎、廣井勇、太田(新渡戸)稻造、高木玉太郎及内村鑑三の諸氏と私とで、其内新渡戸君と私とを除く外は現在では皆故人となられました。

受洗の時各々好む所の Christian name を選び其名で受洗しました、内村君はジョナサンを選ばれました。内村君は友情の德の強い主張者でありましてジョナサンのダビデに對する友愛の情が彼を動かして居つたからであります。

受洗後三年間の寄宿舍生活の間、吾々は信仰の鍛錬を充分に受けました。毎日曜日の午前に特別の小集會を開き、聖書を研究したり、感話をしたり、或は問題を設けて討論したりし、夜は上級生と共に集り、或時は水曜日に祈禱會を吾々丈けで開き互の信仰を磨きました。其内にも内村君の宗教熱は逐次高められて行つて小集會の指導者となられました。

明治十四年に卒業した當時、内村君の最も心をこめた問題は教會問題であつて、第一期及第二期生のクリスチヤン諸氏が協議の結果、夫々屬せる教會より脫會し、こゝに外國の教派より獨立し、其補助、干涉を受ける事無く、日本人の手に依る純日本的教會を建てる事となり、明治十五年札幌獨立基督教會の建設を見るに至つたのであります。

此「信仰の獨立」は内村君の生涯を通じて皷吹された主張であつて、此主義を貫く爲には非常な苦境に陷つた事が屢々あるのであります。獨り信仰に限らず、此「獨立」といふことは、實に武士としての君が、全生涯全生活を通じ、あらゆる犧牲を拂つて固守された貴き旗印でありました。

内村君の逝かれた後、新渡戸君の追想談の内に次の樣な事があつたので自分も之を想ひ起し非常に感を深

うしました。明治十四年の七月、卒業式を擧げる頃、當時札幌の公園であつた偕樂園の池の端に、宮部、內村と我輩三人集つて、社會に出るならば如何なる事を爲すべきやをつくづく話し合ひ、最も敬虔に祈り、國と同胞の爲に一身を捧ぐる旨を述べ合ひ、夫々進む道は異らんも最大の目的は基督教信徒として一生を全うする事を述べ合つたことは、四十九年前の事であつたが、今尙我輩の記憶には昨日の如く思はるる」云々。

明治十四年七月九日、內村君は札幌農學校を首席で卒業して農學士となりました。其卒業式の時に、前記の水產學に關する演說の外に、卒業の級を代表して Baccalaureate address（卒業告別の辭）をされました。志賀重昂氏の札幌在學日記中に其時の狀況を左の如く詳記してあります。

「……終りて內村氏卒業生に代りて校長に多年敎育の厚きを奉謝せらる。尋で御雇敎師に奉謝せらる。言、活潑覺ゐず人をして動搖せしむ。尋で三年生及び吾輩を奬勵するの語あり。嗚呼氏は耶蘇敎の徒なり。故に常に吾輩と仇敵なりしが、今日其慷慨悲憤の言辭を以て吾輩を奬勵したりしは、仇ながらも至誠の然らしむる處覺ゐず感涙を催ふしたり。次に同級生に向ひ、今吾輩は本校の學科を卒業したりと雖も決して溫飽に安んずる者に非ず、之より艱難の道に入りぬべし、今日は其艱難の途の門戸なり、諸君よ請ふ安逸にせず其屍を北海の濱に曝すの素志を棄つる勿れと。謂ひ終りて衆爲に泣き默爲として前の如く一も拍手する者はあらざりき」云々。

同期生一同は明治十四年七月廿九日附を以て開拓使御用掛（準判任官月俸三十圓）を申付けられ、君は民事局勸業課勤務の命を受け專ら水產の調査に從事する事になりました。調査事項中內村君の晩年迄大いに得意とされて居た事は、鮑の蕃殖に關する調査であります。これは後志國高島郡祝津村に於て行つた實驗で、鮑の如何なる大きさに達した時に始めて卵子が成熟するかを一々顯微鏡下にて調査したのであります。その結果、鮑蕃殖保護上に關する意見を陳述した復命書を時の札幌縣知事、調所廣丈氏に提出されました。目下北大農學部附屬博物館に陳列してある鮑の額面及其說明は當時內村君が調製したものであります。

斯く卒業後開拓使に勤めて居つた間にも內村君は須臾も聖書の研究を怠る事はありませんでした。御用にて漁村に出張する時には、必ず其機を利用して聖書の講義や、說敎をしたものであります。又札幌の獨立敎會では日曜の說敎は會員が代る〳〵に勤めましたが、旣にこの頃、內村君は最も有力な會員として人々の尊敬を一身に集めたものであります。

當時內村君の最も心惱ましたのは、君の最愛を同心せしむる事でありました。君は卒業の際得た賞金を以て支那譯の馬可傳註解書四卷を購ひ、之を土產にして父君に進呈致しました。此四卷が讀み了へられた時、父君も亦イエスの弟子となる決心をされ、十二ヶ月後には受洗さるゝに至つたのであります。君の家族傳道熱はこゝに於て益々昂まり、弟、母、妹と相續いて信仰を告白する至りました。

明治十六年五月東京に於て基督敎信徒大會が開催されました時、君は札幌獨立敎會を代表して出席し、熱心な講演をされました。又引續き盛んに傳道を續けて居られたのであります。

明治十五年十二月北海道を辭し上京し、津田仙氏の經營にかゝる學農社の學校に敎鞭をとられ、同十六年十一月農商務省の囑託となり、水產課に勤務する事になりました。同十七年の夏、鮮漁調査の爲佐渡及び北海道へ出張を命ぜられました。又農商務省在職中、日本產魚類目錄を編輯され、これに五百九十九種を網羅して居たと言はれて居ます。

明治十七年三月二十八日內村君は淺田タケ子と東京に於て結婚の式を擧げられました。琴瑟相和し圓滿なる新家庭を營み極めて幸福でありましたが、其年の秋突如重大なる問題の起つた爲、離婚の已むなきに至り、失望落膽煩悶の極に達し、遂に意を決して僅かの旅費を工面し、米國へ身を避けました。斯くしてこれを境

に永久に水産とは別れを告げるに至つたのであります。若し内村君が繼續して水産界の爲に盡瘁されましたなら、今日我國の水産業並に水産學はより著しき進歩發達の跡を殘したことと推察するのであります。

明治十七年十一月、前に述べた出來事に依り急に米國に身を避けましたが、渡米後先づハリス師の紹介によりペンシルヴァニア洲立白痴院に勤務する事となり、此處に八ケ月間白痴の看護夫となり働きました。

しかし君の渡米の目的は慈善事業の體驗ではなかつたので、實は大學に入り再び學に親まんが爲でありました。交渉の結果、アマスト大學より學資の補助を受くるの途が開け、十八年の秋より二ケ年の豫定で、選科生として大學に入學しました。初年に選んだ學科は史學と、獨逸語と、聖書文學の三科目で、第二年は鑛物學、地質學、希伯來語、心理哲學、倫理哲學等でありました。

この二ケ年のアマスト大學に於ける生活は内村君の信仰上に一大回心を來し、君をして歡喜と熱心に燃ゑしめたのであります。それはシーリー總長の温かき同情と篤信の感化によりしもので、君が深刻なる罪惡觀に基き懊惱煩悶の極に達せし時、慈父の如きシーリー先生より斯く敎へられたのであります。「内村、君は君の衷(うち)のみ見るからよくない。丁度植木鉢に植ゑた木の根を度々拔いて見ては成長を焦る子供のやうな事をしてゐる。君は君の外を見なければいけない。何故己に省みる事を止めて只管十字架の上に君の罪を贖ひ給ひしイエスを仰ぎ瞻(みま)ないのか」。

シーリー總長の此忠告に君の靈魂は醒めたのであります。君は此時始めて信仰の何たる乎を敎へられたので、人は修養又は善行に由つて救はるるのでなく、神の子を信ずるに由つて救はるるのであると明瞭に敎へられたのであります。實にこの信仰こそは君の信仰生涯の基本を成せるものであります。

十九年のクリスマスの休暇中丁度私はハーバード大學在學中であつたので、内村君がアマストより約一週

間泊りに來ました。其時は丁度君の宗敎熱が頂點に達してゐた頃で、信仰上の話で持ち切つてゐました。私に言はるるに「君は毎日顯微鏡を覗いてゐるが、君ならば其下に必ず Humanity を認める事が出來るだらうな」と。私は直にそんなものを認める事はないと答へて、大いに君を失望させた事があります。

二十年九月アマストを辭し、更に神學を研究せんが爲、コンネチカット洲のハートフオールド神學校に入學しましたが、神學に就ての惡印象を深く心に刻みつけられ、僅々四ケ月にて退校し、二十一年三月十日、紐育を立ち、海路歸朝の途に就いたのであります。

二十一年五月十六日、五十日の永い海路も恙なく無事歸朝され、三ケ年の外遊生活を了へて、再び溫い母の膝下に戻る事が出來ました。歸朝後間もなく新潟のミッションスクール北越學館からの招聘を受けました。君はこれに應じて赴任の後、日本青年を世界的にする爲に英語の敎授に全力を傾け、又後等の心に眞の基督敎信仰の起り來らんことを熱望し、その育成に努めたのであります。然るに宣敎師等と端なくも衝突し、遂に其年の末に新潟を引上ぐるの已むなきに至りました。

歸京後は江原氏の廨布英語學校の講師として、再び青年の敎育に從事しました。更に明治二十三年、第一高等學校の囑託講師を命ぜられ、こゝに約一年君は全力を盡して歷史を講じ、青年の敎化に意を注ぎました。然るに計らずも所謂「内村不敬事件」なるものが突發しました。これは日頃基督敎に對して好意を有せざる諸新聞雜誌が此事件を針小棒大に誤報して種々な虛說を善く流布せしに因るのであります。事の眞相は明治二十四年一月九日第一高等學校講堂に於て、各大學及文部省直轄學校へ御下賜になりし、　御名を御親筆あらせられた敎育勅語の拜戴式が擧行され、職員生徒一同に其御名に對し奉り禮拜すべしと命ぜられしまた折、君は禮拜の語に躊躇し、只少しく頭を垂れたのに起因したものであります。端なくも之が同僚の間に

問題となつて、新聞などが頻りに、君に對し不忠漢、賣國奴、國賊等の汚名を浴せかけ、一時は君をして天が下に身を措く事を得ぬ迄に窮迫せしめました。君の如き熱烈なる愛國者に對し、この汚名を下せる世俗の如何に無理解なりしかに吾々は驚かざるを得なかつたのであります。斯くして君は終に官學教育界と絶緣す に至つたのでありますが、此事件は實に君の健康に大いなる影響を及ぼし、遂に强度の神經衰弱に罹らしめたのであります。こゝに於て札幌の同級生等相協り、慰藉のため君を當地に迎へ、こゝに約二三週間の休養を爲す事を得さしめました。こゝに悲痛の極みとも言ふべきは、喜壽子夫人が此迫害の最中に病を得て遂に逝去された事であります。

二十四年の秋頃、熊本英學校より招聘され約一ヶ年其處に教鞭を執られました。上級生には英文學を、下級生には數學を教授せられ、尙隔日位に朝の訓話を受持たれましたが、時の校長藏原氏と意見が合はず、遂に辭職されました。

明治二十五年九月、大阪泰西學校の招きを受け、英語、地理、歷史等を教へられました。同時に大阪高等英學院へも一週二三度出講せられました。而して同年十二月下旬、君はこの大阪に於て、日本有數の弓術家岡田澄氏の令孃シヅ子と結婚式を擧げられました。このシヅ子氏こそ三十八年間君と苦樂を共にし內助の功を立てられた今の未亡人であります。斯くして大阪は君の生涯にとり忘れ得ぬ地となりました。

青年教育の餘暇、君は「基督信徒の慰め」及び「コロンブスと彼の功績」と云ふ二冊の書物を殆んど同時に出版されました。これが多少の反響を惹起しましたのが動機となり、君はその胸中に溢るる思想を筆にして天下に訴ふる事を己が天職であると悟り、專心著述に從事せんがため大阪の學校を辭し、廿六年の夏頃京都に轉居されました。

約三年間に亘る京都の生活は、君の最も窮迫に陷つた時代であつて、印刷業者便利堂主人中村彌左衞門氏の義俠ある援助により僅かに飢餓を免れたのであります。其清貧の間に於て「求安錄」「傳道の精神」「地人論」「警世雜著」「後世への最大遺物」等を著し、又流暢なる英文にて "How I Became a Christian" 及び "Japan and Japanese" (後に "Representative Men of Japan" と改題) の二名著を著されました、前者は札幌時代の日記より書起し、米國遊學を了へて歸朝さる時までの信仰生活を記述されたもので、ドイツ、フヰンランド、スエーデン及びデンマークの諸國語に飜譯され、熱心な讀者と理解者をかへつて海の彼方歐洲に於て持つに至つたのであります。この本は今に至るまで愛讀され、クレマンソー、オイケン、ストリンドベルヒ等もその讀者であつたとのことであります。後者は西鄕隆盛、上杉景勝、二宮尊德、中江藤樹、日蓮上人の五大人傑を選んで、日本人を代表するに足る偉人なりとして論じたもので、ドイツ譯が出版されて居ます。

明治二十九年の夏、名古屋の英和學校から招聘され赴任されました。此學校も宣教師の勢力の下に立つた學校であつて、餘り居心地が良くなかた樣ですが、三ヶ月ばかりを辛抱してゐた時、君の爲め開運の道が開かれました。

それは札幌農學校第一期の卒業生である黑岩四方之進氏が、舍弟黑岩周六氏を社長とする萬朝報の英文欄の擔當者として、君を推薦してくれたことであります。二十九年の冬、君が萬朝報社に入社して此欄に執筆し始めた時は、他の何れの新聞にも此欄の設けが無かつた折ですから、當時學生間に非常な人氣を惹起したものであります。明治三十一年の夏君はこの欄を擔當しながら、一方「東京獨立雜誌」を發刊し始めました。其後雜誌事業の多忙なるに伴れて、君は萬朝報の社員たる事を辭して、三十三年の秋から三十六年の秋

まで同社の客員として、一週二回英文や邦文を寄書して居ました。

三十六年十月、日露開戰に當り、君は固き信仰に基づき朝野の反對の中に單身非戰論を唱へ、遂に永年親みし萬朝報社を退社するの已むなきに至りました。君の主義に忠なる、現在のシヅ子夫人を迎へられてより餓死を覺悟して世俗との妥協を拒まれし事數度に及ぶと言はれて居ます。しかし神は其度に計らざる救ひを與へ、君の信仰は益々鍛へられて行つたのであります。

三十一年の夏より三十三年の秋までは毎月三回「東京獨立雜誌」發行の爲め苦闘されました。誌上、君獨特の宗教上、政治上、文學上の意見を無遠慮に書き立て、世の罪惡、僞善を罵倒し、社會の暗黑的反面に對して鐵槌を加へ、燃ゆる不平の一端を洩らしたのであります。併し創刊以來二ヶ年有餘、第七十七號を以て同誌は廢刊されました。

明治三十三年九月廿日、單身「聖書之研究」第一號を創刊されました。其宣言に『「聖書之研究」雜誌は「東京獨立雜誌」の後身なり。彼なるものは殺さんが爲に生まれ、これなるものは生かさんがために生まれたり。彼は傷けんがために劍を揮ひ、是なる者は癒さんがために藥を投ぜんと欲す。責むるは彼の本分なりしが、慰むるは是の天職たらんと欲す。義は殺す者にして、愛は活かす者なり。愛の宣傳が義の唱道に次ぐは正當の順序なり。「聖書之研究」の發行は君の生涯に一大轉機を劃し、前半生の苦闘波瀾は去り、後半生の平和なる傳道の生涯は開け、斯くして君の眞の使命を果すべき時期は到來しました。其後三十年一日の如く、君は其一身を捧げて聖書の研究に沒頭し、其研究の結果を「聖書之研究」誌や著書を通じて發表する事、又其許に集り來る弟子達にこれを傳ふる事の外には、殆んど何事をも爲されなかつたと言つて差支へなかつたのであります。

君の聖書を研究された態度は、丁度科學者が自然を研究するそれと等しく、虚心無我、何の前提を措くこともなく、又教會の定めた教義等に拘泥する事もなく、眞理と信じられたものは、之れを卒直に主張して憚らなかつたのであります。之れがため君の説かれた處に多くの矛盾がありました。この矛盾のために躓いた者も尠くありまんでした。然し此矛盾こそ、君の信仰に生命があり、始終成長發達があつた事を示したもので、實にこれに依つても君の偉大なる事を知るに足ると思はれるのであります。

明治四十年の末、君は東京市外角筈より柏木に移轉されました。大阪の商人で君の忠實なる弟子の一人であつた今井樟太郎の未亡人信子氏が夫君の遺志を繼いで、君の柏木の地所内に「今井館」なる平家の日本家を建てゝ氏を記念する事にされました。こゝで諸種の集會が行はれてゐたのでありますが、漸次君の許に集り教を受けんとする者が增加して來ましたので、新たに講堂を建築するの餘儀なきに至つたのであります。そこで大正二年十月二十八日今井館附屬柏木聖書講堂の獻堂式を擧行されました。其後必要に應じて、度々それに增築改造が施されました。此處に於て君は生を終る迄、熱心に聖書を講ぜられ、キリストの福音を宣傳されたのであります。

明治四十五年一月十二日、内村家の光であり珠玉であつた長女ルツ子孃が、十九歳の春を迎へると共に病革り遂に永眠されました。其臨終の美はしさにいたく感激され、君は信仰上に一大進捗を與へられたのであります。

大正七年九月二十二日秋期大運動第一回の聖書講演會なるものを、東京基督教青年會館に於て開催されました處、聽衆堂に滿ち非常な盛會でありましたので、引續き毎日曜日の午後青年會主催の下に同處に於て講演會を開かれました、然るに各教派の教役者等より故障起り、終に青年會より講堂の使用を斷らるるに至り

ました。斯くして此講演會八年五月末に於て停止しました。

しかるに直にその次の日曜日より前にも優る新なる集會所は與へられ、東京市の中央丸の内大手町の大日本私立衞生會の講堂に於て同年六月一日より十二年六月まで滿四年間に渉り、日曜日毎に聖書を講ずる事となりました。聽衆は毎回四百乃至八百の多きに達し、凡ての階級を網羅し、實に日本に基督敎が傳へられて以來、未だ嘗て見ざる聽衆であつて、洵に一大偉觀を呈したのであります。内村君にとつては益しこれが全盛時代であつて、君の生涯の最高調に達した時であります。

君の大手町講演中最も力を籠められたのは、羅馬書研究であつて、六十回に渉り、キリストに現はれたる天父の愛を宣傳し、又基督敎道德に就て懇々說かれたのであります。其後此羅馬書の講演は、畔上賢造氏の編纂により、又古我良周氏の出費に依つて立派に裝釘されて一書として出版されました。これは内村君の著書中量に於て最大なるものであります。

其デディケーションに

余と同時にキリストを信じ、一生涯を通うして信仰を共にし來れる、同校同級同室の友なる北海道大學敎授理學博士ドクトル官部金吾君に舊友の渝らざる愛を以て此書を獻ず　著者

とあり洵に私としては感激に堪へざる處であります。

大正十二年九月一日の大震火災の爲め衞生會の講堂も烏有に歸しましたので再び柏木聖書講堂に於て講演を行ふことゝなり、集會を午前午後の二回に分ち、午後は專ら青年男女の爲めに講演されたのであります。

大正十五年三月英文月刊雜誌 "The Japan Christian Intelligencer" を内村君主筆となり、山縣五十雄氏を編輯主任として發刊されました。其第二卷は内村君自ら其主筆兼編輯主任となられたのでありますが、これは第二卷限りで廢刊されました。同誌の目的とせし處は、日本人特有の基督敎的信仰を世界に向つて唱道し、併せて日本人の最善を外國に紹介するにあつて、各方面に深き反響を惹起しましたから、よし其發行期間は短かかりしとは言へ、所期の目的は充分に達し得られたことゝ思はれます。老後の思ひ出として最後の花を咲かされた譯であります。

大正八年六月内村君は北海道帝國大學へ、謝恩奬學資金として金一千圓を寄附されました。これは内村全集の印稅の初穗であります。寄附の條件は北大農學部へ進入すべき豫科生の首席者へ奬勵のため其より生づる利子を授與され度しとの事でありました。

内村君は傳道のため各地へ旅行されました。北海道へは、札幌獨立基督敎會後援の爲め明治三十五年、大正元年、同七年、昭和二年及び同三年の五回來札されました。最終の滯札は約一ヶ月に渉り、炎暑特に烈しかりしにも拘らず獨立敎會の爲め熱誠を籠めて援助されました。この事が君の宿痾の病勢を進めたのではなからうかと憂慮されたのであります。

内村君の老年に於て最も心に喜びを感じられた事は、令息祐之君の北海道帝國大學醫學部精神病學講座擔任敎授候補者として、獨逸國へ留學を命ぜられた時であつたと思はれます。祐之君は無事歸朝の上、敎授醫學博士として新設の精神科病室を經營され今は多くの不幸な病者の治療に盡されて居られます。

君の講演と研究誌編纂を手傳はれた人々の内、藤井武、黑崎幸吉、畔上賢造、塚本虎二の四氏は最も重要な位置を占めたのであります。藤井、黑崎の兩氏は早く獨立されて各自の個人雜誌と集會とを持つて居られ、畔上氏は最も永く内村君の片腕となつて援助されて居られましたが、昭和四年の初より獨立され個人の集會を始むる事となり昭和五年より個人雜誌を出すに至り全く獨立されました。塚本虎二氏は昭和四年の末

まで君の講演及研究誌編輯の手傳をされて居られましたが、同氏も君の勸誘により五年の始より全く獨立し個人雜誌を發行し、又特別の集會を持つことゝなりました。自己の獨立を冒されることを何よりも堪へ難しとせられた氏は、同時に他人の獨立をも重んじられたのであります。

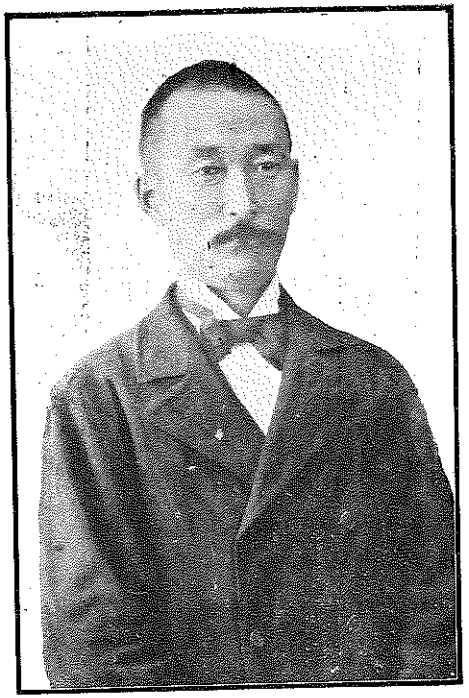
斯くして君は病軀を提げて再び獨立、獨力にて講演、雜誌の事業に當らんと雄々しくも決心されたのであります。幸ひ教友中に石原兵永、藤本武平二氏の如き人々があつて君の仕事を心から援助されました。

君は生前に於て、君の永眠と共に「聖書之研究」を廢刊し、又柏木聖書講演會を解散する樣にと屢々言明せられました。其意見は遺言として尊重せられ且つ實行されました。又君は鑢てより無教會主義を主張されて居られましたから、死後君の名の下に一團體が組織されんかと深く心を痛め、それが爲めに常に警戒を怠らなかつたのであります。

最後に内村君の臨終について一言述べたく思ひます。それは實に立派で君の生涯にふさはしい最後でありました。病苦の中にも君は「聖旨にかなはゞ生き延びて更に働く。然し如何なる時にも惡しき事は吾々及び諸君の上に未來永久に決して來ない。宇宙萬物人生悉く可なり。言はんと欲する事盡きず。人類の幸福と日本國の隆盛と宇宙の完成を祈る」と言はれました。この中には愛國の念、博愛の情、及びキリスト再臨の信仰が表はれて居り、實に大きな魂の持ち主であつた事を知るのであります。又言はるゝに「愈々最後が來たのだらう。福音萬歳、日本萬歳」又「誰々を許す、又自分の罪もキリストにより赦して頂く」と。實にこの言葉を聞いては、キリストの最後の模樣が想ひ起さるゝのであります。

キリストは世に勝ち給ひました。君はキリストによりて世に勝つたのであります。君は斯くて徹頭徹尾キリストの御導きにより、その僕として世と鬪ひし後 Death Triumphant 勝利の死を遂げられました。君の全生涯を顧みて吾等は感慨無量であります。

附記　この小傳を書くに當り、溪謙治氏著「信の内村鑑三と力のニイチエ」に負ふところが多くありました。



故佐瀬辰三郎君

亡友佐瀬辰三郎君を憶ふ

君は會津藩士佐瀬量之助の三男として、文久二年九月を以て呱々の聲を揚げた。七才にして偶ま戊辰の役に際會して、嚴父は戰死し、住家は兵燹に罹り、一家非常の苦境に沈淪したので、慈母せい子に伴はれ、長兄等と共に北海道に渡り、札幌なる叔父羽山氏の扶助の下に成人したのである。

明治十三年八月、第四期生として札幌農學校へ入學し、同十七年優等の成績を以て卒業し、卒業後母校に留つて化學を專修し、次で助教授に任ぜられ、爾後札幌中學校教諭（廿八年八月）、鹿兒島縣第三尋中教諭（卅一年十月）、岡山縣師範學校教諭（卅二年四月）、千葉縣茂原農學校教諭（四十年四月）、琉球中頭郡各村組合立農學校教諭（四十四年六月）、鹿兒島中學校囑託（大正七年一月）、等を奉職したが、大正十三年四月を以て官職を辭し、爾來引續き閑散の位地に在つた。

左に佐瀬君と僕との間に取結んだ交遊を叙して君が性格の一端を紹介せんとする。

母校在學中君と僕とは常に同室に學んだ。資性溫厚なる君と粗暴にして喧嘩好きの僕とが、怎うして四年間一度の言ひ爭ひもせず、仲好く暮すことが出來たか、實に不思議に思はれるが、是は君が寛大にも僕の數々の不愉快を大目に見て、優さしく梶を取つてくれたからであると、只管感謝に堪へないのである。

僕は卒業後間もなく山梨縣へ赴任することゝなり、君は札幌驛まで僕を見送つてくれた。發車の間際となつた時、君は兩手で頭を抱へ「河村よもう是れで貴樣と別れるのかなあ」と悲痛の聲を放つたので、流石に頑强なる僕も止め度なく涙が流れて、一言も發することが出來なかつた。

慥か明治廿二年夏の事と記憶するが、君は母校から新入學生（故加藤恩治君も其中に居つた）引取りのため上京を命ぜられた。皆京するや君は夜十一時過に芝區札の辻なる茅屋の門を叩いた、其時の兩人の嬉しさ加減!!! 翌日から君は宿を去つて僕方の二階に陣取り、自用車を君の專用に供し、斯くて十數日間の滯在中。優待日程を編み、東京案内の勞に當りつゝ舊交を温めたのである。

其後は久しく相會するの機會を得なかつたが、君が岡山師範に在勤した當時、僕は熊本縣に在職したので、上京の往返、君の寓居に投宿し、君の家族と共に團欒の樂みを恣にする機會を得た。或る時令孃より「此おぢさんは家のお父さんより餘程面白ければー」といはれたことがあつた。或る時は「御父さんはこんなに仲の好いお友達を持つて結構だはネー」といはれて責任感念に打たれたこともあつた。又或る時は「君の璞念人さ加減を改良する」と稱し妻君の同意を得て、或る方面に君を引張り出して、暴れまくつたこともあつた。

僕等兩人が共に學窓に在るや、君は女房役として親切に僕の世話を燒いてくれた、其報復をするには仕事を共にせねばならぬと考へたが、種々の事情があつて其希望を達し得なかつた。然るに計らずも其機會が到來した。大正十四年の秋愛媛縣北宇和郡吉田町に愛媛農事株式會社を創立して、醱酵素の製造業を經營するに當り、君を招聘して技師長の任に當らしめた。流石に化學の老練家だけあつて、種々の名案を提供してくれたので、益する處が多かつた。吉田町長兼愛媛農事株式會社長にして愛媛縣無比の名物男（現代議士）たる清家吉二郎氏は、吾々兩人が仲好く働いてゐるのを見てつくづく羨ましがつたことであつた。然るに約半年にして君の健康が許さぬ樣になつたので、鹿兒島市西田町なる自宅へ引取らしめたのは、實に遺憾の至である。

君は五男二女の子福者であつた。長女は山口家に嫁し北米加州サンタ、アナロに於て夫を援けて農業に從事し、長男昌一（三十七才）は關西中學を出て宮崎高等農林に奉職し、二男昌二は沖繩農學を出て宇都宮市の都市計畫部に在勤し、三男昌光は東京帝大經濟部出の法學士で山口銀行東京支店に勤務し、四男昌武も亦東京帝大經濟部出の法學士で東京遞信局に奉職し、次女壽子は鹿兒島高女活水女子專門學校出身で鹿兒島幼稚園に奉職し、五男昌利は七高在學中である。多くの出藍の譽ある人材を世に寄與したのは、君一家の誇りと云ふべきである。

君の家庭には一つの特色があつた、夫れは君の後妻信子と、亡き前妻との間にもうけた五男二女との折合が頗る宜しく、到底なさぬ仲とは思はれなかつたことである。是は夫人の努力もあつたであらうが、君が何となく兩者の間を融和する注意を周到に行つたからでもあらうと思ふ。寔に和氣靄然たる美はしい家庭であつた。

君は老來漫性の尿毒症に罹り、昨年十月三十日第一回の發作を見たが、間もなく元氣を恢復した。然るに翌三十一日に再發し、突如として眠るが如くに他界した。享年六十有九。長男次女五男等は枕頭に侍することを得たが他の子女等は不幸にして間に合はなかつた。

君の遺骨を埋葬する際、墓穴を掘るに當り土中より一體の地藏尊を發掘したといふ。長男昌一君の紙面に

「地藏尊を世に出し自身代つてその穴に入る、佛の如き父には如何にも相應しき事と一同奇異の感に打たれ候。該地藏尊は父の永久の伴侶として墓畔に安置仕候」

とあつた。實に君は佛の如く、神の如き人格者であつた。高潔なる人格者であつた。恐らく君は一生を通じて虛言を吐いた事があるまい。君が他の蔭口を利いた事を知らない。君の性格が所謂中庸を得た上に、表面に立

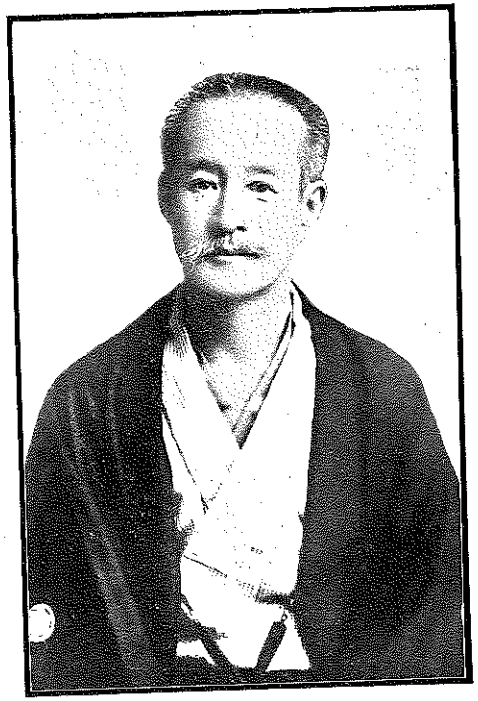
つて奮鬪しなかつたので敵を求めなかつたやうだ。君は羊の如く穩かに鳩の如く優しかつた。「柔能く剛を制す」僕の如き暴れ馬でも君には齒が立たなかつた。

君は幼少の時から貧苦の裡に育つたので、耐艱力に富んで居つた。社會に出でてより屢々職を失ひ生活難に襲はれたが「是れ天命なり」と悟つて、何等悲觀もせず、愚痴も零さなかつた。是れ常人の容易に企て及ばざる處ではないか。奇拔ならざる君の一生中取つて學ぶべきもの多きを覺ゆる。

君は口も八丁、手も八丁の敏腕家ではなかつた。世人は君を平凡の人といふかも知れぬが、僕は隱れたる偉人であると斷言するを憚らないのである。

吁、僕は親しき友を失つた。掛換のない愛する友を失つた。

河村九淵



故和田太吉君

故和田太吉君小傳

君は福井縣、舊小濱藩酒井家に仕へたる門閥和田紘甫氏の三男なり。藩主酒井侯が幕末の頃京都所司代として鎮護に任じたる頃、父君は隨從して同地に滯在したりしときの文久二年六月廿二日を以て生れ、父君が維新の變、一隊の兵を率ひて東北の野に轉戰し、役終りて後從て東京に移轉し、居を牛込矢來に構へ愛撫訓育を受け、長ずるに及びて漢英の學を修め進んで東京大學豫備門に入りたりしが、當時北門の開發に關して は開拓使廢止に伴ひ世間に種々の論議を牽き青年輩の血液を紅潮せしむるものありしが、君亦少壯氣鋭、慨然として志を北邊に馳せ、明治十八年七月恰も札幌農學校に於て本科生を東京に募集するあり、應募合格して其當時母校を所轄せる農商務省の北海道事業管理局より札幌農學校貸費生を命ずとの平仄に合はぬ樣な辭令を受け、余等十三名品川丸と云ふ七百噸の大船に乘込み、三等室の蓆棚に一枚赤毛布を給され、助教授内田瀞君に引率せられて横濱港を發し、二晝夜を費して漸く函館に上陸し、次で小樽への定期船を待ち、日を經て札幌に着し、爾來四ヶ年寄宿舍の學窓に在り、二十二年卒業の後帝室林野管理局に奉職し、北海道に於ける御料地の撰定に從事し、アイヌを先達として道内各地を跋渉し、測量探險一意專心力を本道に致したりしが、廿五年故ありて農商務省に屬轉し、初め山林局、後水産局に勤務したりしが廿二年病を得、靜養の爲千葉縣に轉地せり。然るに其後或る動機よりして人の職業中、人が人を造るより尊貴なるはなきに悟入し、翻然意を官途に絶ち、聘せられて千葉縣佐倉中學校教頭となり、在職十六年專心育英の事に任じ孜々として倦むことなく、大正二年一たび他に轉ぜんとして職を辭するや、地方の有志君の德望識見に服するもの相謀

て懇請止まざりし爲め諾して千葉縣匝瑳普通學校、松尾高等女學校、成田高等女學校等の教務を受諾し、後ち曩時の教へ子たりし千葉縣多額納稅者西村繁氏が八街農林學園と云ふ實業學校を經營するや、專ら君に依りて子弟陶冶を期待せんとし、懇篤なる招請より涙もろく又意氣の感ずるの氏は快く之れを諾して爾來之れに從事したりしが、昭和三年九月不幸中風症の氣味にて一切の務を辭謝し、依然佐倉町に在りて病を養せしが本年七月長男諄氏の住地横濱市に來遊し、折節其の當日他に嫁せる三女死去のことより傷心甚しく、爾來病革まり十月九日を以て諄氏の家に夫人其他の手篤き看護を受けつゝ溘焉易簀せらる。享年六十九。

君は同級中の尤年長者にして志操行爲に於て常に級中を壓し、殊に長兄には主獵官たりし和田義比氏あり、次兄には曩に吾國の地質鑛山に於ける重要なる事務を鞅掌し、且つ最初の製鐵所長官たりし貴族院勅選故和田維四郎氏ありて、級中の貴公子たる素質自ら備はり、概れ其の牛耳を執り、余輩寒鄕の窮措大が學窓に入り初めて小倉服の洋服を着し、長靴を給せられて遽のメタモーホースを爲して得々嬉々然たりしには似もやらず、級中唯一の立派なる銀時計を弄して「之れは兄貴が洋行土產なり」などと一同を羨やましがらせ、社會的智識に於ても常に儕輩を逸出し、寛容よく友に接し、恬淡物に拘せず、每時吾人團欒の音頭取にして君著し席にあらざれば何となく物足らざるの感ありき。余輩が日に北門の鎖鑰云々など云ふも、其實官費修學の御蔭を有難く思ひ又其を誇りとしたりし稚態に比すれば、君の如きは自ら一頭地を抜き、遊學の意實に北海の進運にありて思慮の高遠なりしは疑なきところとす。

君の暉子未亡人は岩手縣士族清水暉元氏の長女にて、同級藤根吉春氏の媒酌により結婚し、二男三女を生み、長女早世、三女最近に沒し、嗣子諄氏は早稻田商學士にして三菱倉庫會社に勤務し、次男實氏は遞信省に奉務す、二女は他に嫁して健在なり。氏の婚姻に就き一の傳ふべきは、君が一日藤根氏に「貴樣はあれの爲によき女房を捜せ」と云ひたりしに、或るとき藤根が馬を馳せ匆忙として君を下宿に訪ひ突如「見付けたぞ、すてきなやつを」と云ひて先づ面喰はせて、偖て手を打て詳細に入り、婚約次て成立せるが襲式に至らずして君は突然東京に轉任し、夫人の父君も俄かに群馬縣廳に轉じて札幌より移居し暫時互に其の居所を詳にせず、其間に他より嫁談の話などありしが約を守りて之れを退けたりしが、一日帝都の眞中、而かも日本橋通の圓太郎馬車の中にて兩者偶合し、手を打つて奇遇を話し、次て圓滿なる婚儀を擧げ、琴瑟常に相和せりとは蓋し君が大事なる人を忘るゝ筈もなけれども、家を持つには相應の苦心も準備も必要なると蟲のわく心配なしと其の父君を信賴せる爲なりしは吾等が保證の必要もなきことなれども、友人間に少し忘れものが大過きた抔との冗談もありしならん。斯の如く君は物に拘泥せざりしのみならず一面閨達を求めず、名利を意とせず、陶然一醉すれば壺中の天地縱横無碍、豪懷を寄せて肱を枕とし、早寢曉起、趣味としては只園藝草花あるのみ。嘗て佐倉中學生間に一ットヤー節あり、其の中に

五ツトヤー　いつも機嫌の和田先生、月給殘りしためしなし

と云ふがありしとぞ。以て君が子弟を愛撫訓育するの妙諦を領得し、其の信賴を得たりしを知るべし。

君の居所は東京とは一時間餘の短距離なりしも、恰も百里を去るものゝ如く敢て足を鄙門に入れず、或る年同級藤田經信氏と東京に會し、歸家して諄氏に「近頃東京では穴の中で飯を喰はすが、貴樣は其れを知るか」と言はれ、段々聞き見れば其れは十餘年も前から營業して居れる元村井銀行の地下食堂の事なりしとぞ。又八街農林學園に聘せらるゝや家に歸りて「先生は此の學園にて死んでくださいと西村が云ふたぞ」と笑はれしことありしとぞ。其の性行並に師弟情誼の深かりし一且として見ることを得ん。

余は學窓を出でゝ以來四十年餘不幸再び相見るの機會を得ざりし。先年東京に移居し之れを君に報ぜしに

對し「近頃其の方角に親類が出來た、近く訪問せん」など言ひ越されしが、遂に其事なかりしは君が病の爲歩行意の如くならざりし爲なりしとぞ。余は之れを知らず、近距離に在り而かも閑人を以てして氏を訪ふことを怠りしは畢生の恨事とす。溘亡の報を得直ちに馳せて靈前に告別し、併せて潸越ながら同級總代の意を令嗣諄君に致せり。恨事何ぞ限らん、君も亦足一たび活せば北海道に遊ばんと家人に云ひ居られしとぞ。諄君は父君に瓜二つにて、余は一見して父君の兄さんに面會せるの感を爲せり。何となれば、余の君と別れしは其の二十八歳のときにして、諄君は既に三十六歳の働男子、態度風格頗る相似し、玆に揭げし小照と對比して殊に其感を深ふす。敢て同期及び同時代の諸友に報ず、希くは君を幽冥に呼起して當時を追憶せられんことを。

昭和五年十一月

同級生　赤羽雄一誌

故平野他喜松君

故工學士平野他喜松君小傳

生者必滅の理は悟り居れども、突然異境に於て親友の訃音に接しては驚愕哀悼、感慨無量なるものあるを禁じ得ず、況んや又故人は學窓に於ける余の唯一の級友たりし關係上、一層遺憾を深くするに於てをや。同窓會幹部の需めに應じ茲に謹んで故人の小傳を記し、一面に於ては傳誌依囑の責を塞ぎ、他面に於ては之を舊友の靈に供せんとす。

君は明治二十年、舊札幌農學校内に新設の工學科第一期の募集に應じ試驗を通過して入學を許されたり。余亦同樣にして爰に初めて君と級友の交りを結ぶに至れり。當時同級の學生は全體五名なりしも事故のため減少して單に君と余とを級中に殘すのみとなれり。即ち前述の如く君は余の唯一の級友として恰も一家庭に於ける兄弟の如く、終始學窓に机を並べながら螢雪の功を積み、明治二十四年共に業を卒へたり。

斯る奇緣の下に共に刻苦勉學せる四年間、君は余に取りて實に益友なりき。何となれば、君は在學中專心學業に勵み、四六時中讀書に、研學餘念なく、嗜好としては菓子果物及煙草を用ひ、稀に圍碁を試たみることあるも其以外に時間を空費したるを見ず、其勤勉振りは余に好模範を與へ、無知覺の間に余亦之に隨伴せるが故なり。

君は體育運動を好まざりし結果稍羸弱なりしも、頭腦明晰、學業中君が最も天才的に興味を有し又最も勉めたるは數學にして、應用學の方面は餘り好まざりしものゝ如く、從つて純正數學は其最長ずる所なりしかば數學に就ては既に在學中に後進の僚友を指導誘掖すること最懇切を極めたりしを以て、後進皆之を德とせり。

君は工學科卒業の後研究生を命ぜられ余亦同樣なりしも、君は元來得意の純正數學を一層研究するの念慮深きため更に東京理科大學の撰科生として遊學することゝなり、余は寧ろ應用の方面に志せるを以て卒業後は自然に兩者の進路の方向を異にし、又互ひに居所を別つに至れり。數年の後君は母校に數學の教鞭を取り余は技術家として主に北海道廳に職を奉じ、爰に再び共に札幌に居住することゝとなり常に舊交を暖め居たりしが、爾來君は其專門とせる純正數學の外に宗教及び哲學方面にも其趣味を加へ、熱心なる日蓮宗徒として其教義及哲理を研究敷衍するの傾きあり、余の家嚴が同宗なりし關係上、時々拙宅に來訪の際互に教義に關する問答討論の行はるゝを見聞せり。余は此の討論には殆んど門外漢なるの觀ありしも偶々傍聽の態度にて之を觀へば、君は宗旨に對しては一廉の凝り家にして、等しく日蓮宗と雖も就中富士派に非れば不可なりと主張せるに對し、家嚴は富士派とは往時より不受不施派と稱するものゝ事なりやと質したるに、然らずして全く別派なりと答へ熱心に之が皈依を勸誘して止まざりしことを記憶せり。君の信仰は君の嚴父を通じて注入せられたるものゝ如く、經文に謂ゆる「勇猛精進」を「モットー」として進み、其說く所の「一身欲見佛、不自惜身命」なる文句の如く、其專門の研究に於て、將又其處世の方針に於て最も勇悍に邁進せり。即ち或は教壇に於て、或は晩年の獨立生活に於て、其所信と勇氣を以て其生命となし、外聞及び體裁等に拘泥せざりしため局外者には一見不思議の感を懷かしめ、君の精神には異狀ありと思ひ居れる者多きも、由來物質的の事物及び環境は既に君の眼中には何等の價値を認めざる程に大悟徹底し居れり。之は宗教哲學の信仰より來れる結果なりしことは、多年深交の間柄にあり又從つて幾分か其感化を受け居れる余には明瞭なりしを以て、他人が君を目して狂者なりと唱ふる者ある毎に余は其然らざるを辨明し、其信仰に基く所以なるを釋明したるも人多くは之を信ぜざりき。要するに君は遠き以前に既に悟りを開き居れるも之を認むる人尠かりしなり。

然るに愛に君の行ひに於て最も敬服すべきは常に孝養の心深く、其父母に對する尊敬の態度及待遇の周到なる等近代人に稀に見るの美德を備へ居たりしことなり。從つて又長幼の序を立つること極めて嚴格なりき。之に關する逸話と稱すべきは、其目下又は同僚よりの來狀に「平野他喜松殿」と記しあるときは大に立腹し殿稱は上長に對して用ふ可らざるものなり、之を用ふるは侮辱を意味し甚だ不禮なりとし憤慨し居れり。故に君が同僚に對して發する書狀にも常に「何々樣」と書し居れり。之れ君が長幼の序を立つるに嚴格にして又人に對するの禮義を重んじたる事を證するものなり。其子女に對する教養の嚴重なりしは自然の皈結なり。

余は大正七年母校の地たる札幌を去つて以來、不斷海外生活に奮鬪するの已むを得ざるに至り。自然君との間頻繁なる通信を欠くに至りたるため其近況を審にせざりしが、突然同窓會幹部より君の小傳を調製することを依囑せられて、初めて其訃を知り驚愕哀悼の至に堪へず、惟ふに君は其平素の信仰よりして晩年に於ける物質的境遇等を顧慮せず安心して成佛せられし事なるべしと信ず。余遙かに益友の冥福を祈りて止まず。爰に君の小傳を誌するに當り、多くの人に知られざる君の隱れたる孝行と、甚深なる信仰の眞相とを序述し、善良なる孝子且つ熱心なる信者たる君を同窓より喪ひたるを悔みて筆を擱す。噫悲哉。

昭和五年十二月徹宵して之を誌す

支那の一角に於て

岡　崎　文　吉

故目黒末之丞君

故目黒末之丞君小傳

目黒末之丞君は明治二十二年七月札幌農學校を卒業して後、直に東京帝國大學に入り採鑛冶金學科を修め、同二十五年七月を以てそれを卒業したので、農學士と工學士との二つの稱號を所持して居りました。資性溫良恭謙、常に莞爾として寡默、併し内に伸々の元氣を抱き、健康も衆に優れて居りましたから日夜勤勉努力、孜々として琢磨の効空しからず、東京成立學舍在學時代はさまでの學才も認められなかつたものが、札幌農學校卒業の頃には業績頗る優秀の方であつた處から、佐藤昌介先生の御推薦で、北海道炭鑛株式會社の學資を受け、進んで東京帝國大學に入つて、採鑛冶金學科を修むることになつたのであります。それ故に東京帝國大學卒業の後は、直に北海道炭鑛株式會社に入り、其後三菱合資會社鑛山部又は秋田縣椿銀山に就職し、明治二十九年六月、農商務省鑛山監督技師に任官し、札幌鑛山監督署の部長となり、茲に初めて官海の人となつたのであります。それから大正十一年三月退官するまで二十六ヶ年間は、鑛山監督官或は鑛務官として、大阪、東京、仙臺及福岡の各鑛山監督署に在勤し、鑛業行政の爲めに大に盡瘁する處あり、到る處で令名がありました。農商務省で炭坑爆發豫防規則を制定するに當り、君は其の委員となり、多年調査研究の結果に基く君の意見の採用されたものが多かつたとの事であります。鑛業雲報抔には、君の筆を執つた、炭坑爆發に關する報文も段々あり、又方城炭坑大爆發の時など、其の英文報告書は、北米合衆國の鑛業雜誌「コーリヤリー　ガーデイヤン」にも發表してあり、英國の炭鑛雜誌にも一二回發表してあります。就中明治三十八年から大正十一年にかけて歐洲大戰前後の鑛業界未曾有の好況時期であつた十七ヶ年間は、所謂「黒

ダイヤ」の名産地たる福岡鑛山監督署に鑛業課長として其の職務の嚴正公平振なり、又職務柄勤もすれば陷り易い誘惑の地獄の穴（Facilis descensus Averui）にも落ち込まずに、潔白に其の身を保つた人格なりに對しては、官民共に深甚な敬意を表する處で、其の間の事績や小話を集めたら、尨大な一書を成すべしとは、今尙ほ當地知人間に語り傳へられて居りまする。退官の際は特に高等官二等正四位に陞叙し勳四等瑞寶章を授けられて居りますのは、多年格勤の功績を表彰されたものでありませう。引き續き尙ほ大正十一年四月から同十五年七月まで、帝國炭業株式會社とか山口縣沖見初炭坑株式會社とかの顧問に任じ、種々民間事業に劃策したもので、其の業績の中でも、海底坑業の浸水防除設備の如きは、君の多年研究の萬分の一を實現したものであります。何しろ君の學力と體力と勉强力とに加ふとに、年と共に築き上げた經驗を以て劃策するのでありますから、行く處で仕事が擧つたのは決して偶然ではなからうと思ひますが、もう一つ君には信仰と云ふ力があつたのであります。君は札幌農學校在學時代、明治十九年六月廿一日に、當時大島正健先生の牧治されて居りました札幌獨立教會で、基督教の洗禮を受てから、熱心な基督教の信者となり、其の堅實な信仰が學業をも大成せしめ、其の德器をも研ぎ上げたものであると思はるゝ。君は福岡では、在官當時から福岡メソヂイスト教會の幹事、幹事長、管理人、組長などとして、喜んで教務に執掌し、民間事業から退いてからは、一層專念に信仰に邁進して、新禱會、禱告會には必ず出席し、家庭訪問、病者の慰問、さては花の日會などの時は、自から街頭に立つて花を賣つたものであります。其の意氣の老いて益々壯烈であつたことは、愈々光輝ある信仰生活に入つたからでありませう。君は決して社交的の人ではなかつたけれども、急がず焦らず、徐々に修練の効を積んで往つたものでありました。私は君と札幌農學校の同級生でありまして、闊らずも昨年から當福岡に住居することになりましたから、君とも久方振で互に往來して、昔話を致して居たのでありましたが、本年六月六日、君は突然腦溢血で永眠してしまつたので、私も餘りに本當ない別れに呆然と致しまして、悲しく淋しい思を致して居ります。君は慶應二年三月二十六日、目黑陽吉氏の二男として仙臺市に生れたのでありますから、年を亨くること六十五歲でありました。夔僕健啖で、まだまだ國家社會の爲めに奉仕の出來る身柄でありましたのですが、洵に哀惜に堪へません。君の夫人は仙臺出身の有名な東洋畫家、木村香雨先生の女で、貞淑能く家を治め、長男貢君は本年九州帝國大學法文學部を卒業し、長女は既に當地の高等女學校を卒へて家に在り、其他、一男一女は今が修業盛りであります。顧るに、明治二十五年君が東京帝國大學を卒業して直に鑛業界に入つてから、大正十五年の鑛業界を退くまで、前後三十五ヶ年の間公私鑛業界に於て、到る處能く令名を以て其の任務を果し終つたことは、君の人格の當然な結果ではありませうが、さあれ種々な危險極まる坑內作業に、君は持ち前の正直な責任觀念から、大低の人の能く這入らない樣な危險を冒してまで、必要な場合は敢て身を提げて深く隅々まで探ぐる度毎に、君は何時でも全く身命を賭して居たと云ふ。此のけなげな覺悟があつたればこそ、君も終に能く我邦でも、有數な立派な鑛業技師となつもので、而して此の誠實な精神は、燦然として君の生涯を一貫して居ることが偲ばれるのであります。

昭和五年十二月廿一日

同級生　長　崎　常　撰

故相馬經治君

故相馬經治君小傳

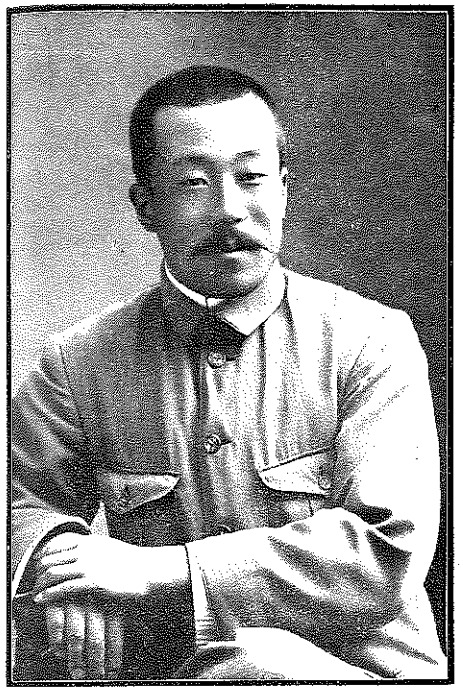
君明治二年青森縣南津輕郡竹館村に生れ、黒石中學校を經て、弘前東奥義塾に入り、後札幌農學校に遊び、明治三十年卒業、農學士となる。出て〻内閣官報局、農商務省特許局等に奉職し、一旦野に下り、又郷里郡役所の勤業係、農學校教諭等に任ぜられしが、再び職を辞して實業界に投ず。晩年大阪に出て〻、三たび職を求めしも、志を得ず。昭和五年九月八日病革まり、大阪郊外岡町櫻塚の僑居に歿す。二女三男あり。

余君と同郷にして、再び校門を同くし、因縁浅からず、永訣に臨み一偈あり、曰く

君元抱「大志」　蹉跌悉成「空」
魂氣應「歸」寂　窮通一瞬中

録して以て君の英靈に捧げ、敢て辱知諸彦に報ず。

於大阪府廳　成田軍平



故江刺家昂君

故江刺家昂君略歴

君は明治十一年十二月九日を以て北海道増毛町に生る。幼にして穎悟、増毛小學校並に札幌師範附屬小學校に入り小學教育を修了し、更に札幌北鳴學校を經て東京海軍豫備校に學び、三十二年來りて我が札幌農學校豫修科に入學し、三十四年七月本科に進み農學乙科を專攻し、三十九年七月其の業を卒へり。次で北海道廳技手に任ぜられ、第三部畜産課に勤務し種牡馬檢査員たり、皆其の職に適ふ。

三十九年十二月一年志願兵として旭川輜重兵第七大隊に服務し、四十一年十月東北帝國大學副手として畜産學教室に勤務し、次で四十二年十一月馬政局技手として長萬部種馬所に在勤し、種馬掛長兼耕作掛長となり物品取扱主任たり。四十四年二月十勝種馬牧場掛長に轉勤し、四十四年七月退官す。後大正四年滿鐵會社に入り、滿蒙の山野を跋渉して産業の開發に從事すること二年なり。歸朝の上東京服部泰吾商業に入り、其の才能を認められ間も無く札幌支店支配人として鐵管及び機械類の販賣、工事請負等に從事し、成績漸く擧がり前途有望を以て目せらる。此の間札幌競馬會開催委員を囑託せられ、本道各地競馬の事に斡旋し、馬匹の改良、競馬の合理化を以て自ら期する所ありき。君往年胃潰瘍を患ひ元氣著しく衰へたるも、尚病軀を携げて各地に出張し其の職に盡瘁せり。不幸にして自宅にてストーブ取付中腸捻轉を起し直ちに入院加療僅か に三日、遂に起たず。時に昭和五年十二月十八日なり。惜むべきかな。

君世々南部藩に仕へ、資性磊落にして奇偉頗る氣慨あり、學生時代に在ては「スポーツマン」として盛名を四方に馳せ、特に乘馬に堪能なり。而かも其の豪放不軌却て君の成功を妨げ、志業未だ十一に達せざる憾

ありき。

君岩内の漁業家永井氏の女を娶り三女を擧ぐ。長女は札幌廳立高女を、次女は藤高女を、而して三女は目下藤高女在學中なり。夫人良淑の譽高く、多年心勞の結果病弱となり、長女も亦弱し、誠に同情に堪ゆざるものあり。

昭和六年二月

同期生　高橋孝治記す

故高木直一君

故高木直一君略傳

嚴寒白雪地を蔽ふの候、高木直一君は僅かに四十五歳を一期として逝く。嗚呼命耶數耶、何んぞ天の君を奪ふの速かなるや。

君は先代松三郎氏の長男として明治十九年二月群馬縣西群馬郡箕輪村にて呱々の聲を擧げ、廳立札幌中學校に學び、同三十七年七月札幌農學校豫科に入學し、進んで東北帝國大學農科大學に入り園藝學を專攻し、明治四十三年七月同大學を卒業せり。同年十二月一年志願兵として旭川輜重隊に入營し、期滿ちて除隊となり、大正三年二月輜重兵少尉に任ぜらる。明治四十五年五月北海道廳技手に任ぜられたるを以て社會への第一歩とし、其後道内に於て任地を變じたるも約二十ヶ年に亘り北海道の農事行政及び指導に當れり。特に最近は道廳産業部農務課主任技師として道農業界に重きをなし、種々改良の爲め劃策する所ありき。然るに一昨々昭和三年初冬腦溢血を病み頗る重し。一旦快癒に向ひしが未だ全治するに至らずして公務に服しつゝ療養怠らざりしも、昭和五年一月廿三日に至り病再發し遂に立つ能はざるに至り、同年同月廿五日長逝す。誠に痛惜措く能はず。嗚呼悲しい哉。

君は體格強健にして性質溫厚篤實、沈默寡言寧ろ實行の人にして、然かも圓滿高潔なりき。幼より園藝に趣味を有し、既に學生時代にありて菊花の栽培には一家をなせり。父君も老後君に習ひて園藝を好むに至りたるを以て、孝心深き君は父君の爲めに住宅の一隅に溫室を建て、以て老後を養はしむるに務めたり、大正十二年官命を帶びて歐米視察の途に就き、同年秋伯林に居を定めて歐洲各地の農事を見學したりしが、飛電

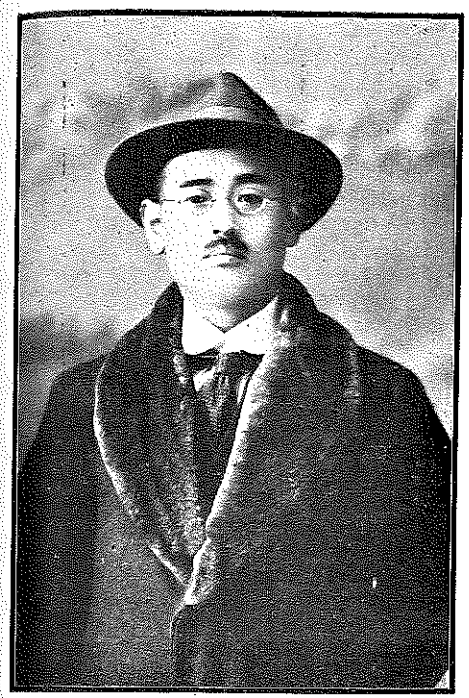
君が伯林の假寓に來り父君の訃を傳ふるや、平素孝養至らざるなかりし君の落膽言ふ方なかりき。予當時伯林滯在中にして君を慰むるの詞なきに窮したり。母堂既に歿して父君のみに仕へたりし君は其臨終に會ふ事なく、然かも異郷にありて父君を弔ひし當時の狀察するに餘あり、恐らく君が終世の恨事なりしなるべし、誠に同情に堪ねざりき。

君は梁田家より夫人を迎へ、家庭極めて圓滿にして一男三女あり。慈父の恩愛に飽くことを知らざる子女は幼にして然かも皆未だ獨立の域に達せず、嗣子は末子にして當時僅かに十二歳なるを思はゞ、逝きたる君も恐らく心殘り多かりしなる可し。然れども内に賢明なる未亡人あり、遺兒は必ず君の志を繼ぎ名を擧ぐべきを信ず。君以て瞑すべし。

君逝いて既に一ヶ年を迎へたり、然れども君尚ほ余の眼前にありて談笑するが如し。而かも君今や空し、追惜の情に堪ねず。君が小傳を錄して感慨無量を極む。

昭和六年一月

井口生



故山口正造君

故山口正造君小傳

昭和五年六月二十日學友山口正造君突然長逝せられ、其の訃報に接し非常に驚かされた。お の學生時代極めて頑健であつた君の俤を想ひ浮べて、人生の無常を今更ながら痛感したのである。

卒業當時札幌に於て別れてより、遠く離れて互に相遇ふの機會を得なかつたが、學生時代或は天鹽の演習林に於て、天幕生活で測量實習をなし一夏を過し苦樂を共にしたことや、或は內地への修學旅行等數々のことが想ひ浮べられ、君の溫容髣髴として眼前にあるも、今や幽明其の界を異にし、永久に遇ふことを得ぬのである。噫。

君は明治十八年三月三日、埼玉縣入間郡高麗村横手に於て同地の名家山口吉太郎氏の四男に生れ、長じて飯能小學校を終へ、縣立川越中學校を卒業し、札幌に學び大學豫科に入り、卒業後林學科に入り大正五年七月六日卒業した。學校時代の君は極めて溫厚で悠々人に迫らざる風あり、口數少きも誠に明き感じを與へ、同級生中年長者で、其の一擧一動は吾々十數人の仲間中誠に兄貴株として畏敬するに充分であつた。大正六年五月埼玉縣秩父郡立農林學校教諭に任ぜられ、在秩中大正六年六月同縣入間郡柏原村長谷川園三氏長女爲久子と結婚し、翌大正七年八月公立實業學校教諭兼公立實業學校舍監に任ぜられ、次て大正十一年十二月長野縣立木曾山林學校教諭兼舍監に補せられた。當時君には御子が無かつたので、大正十四年十二月すぐ上の令兄の子女春子（五才）を貰ひ本年に及んだ。

君は元來壯健の質であつて學校奉職中も病氣缺勤は一回も無き程であつたが、昭和二年の秋腎臟の疾患に

冒され、一時は重態で憂慮せられたるに幸ひ療養の結果全快せられたが、本年春頃より神經衰弱の氣味にて三月を以て學校を退き、茨城縣磯原町の長兄の所に轉地し、非常に體の具合良く家族一同喜んで居られたるに、十九日の晩迄は常と少しも變りなかつた由であるが、五月二十日急に狹心症を發し、發病後僅かに二十分で午前三時に永眠せられた。誠に哀惜の情に堪へない。行年四十有六歳。前途春秋に富める身を以て然かも突如として逝かれ、御令閨始め御遺族一同の御悲嘆如何ばかりであるか察するに餘りある。

當時高等官五等待遇從六位であつた。遺族は郷里横手に、子女春子は高麗村小學校尋常四年生として通學中である。

君は秩父農林學校では教頭として、又木曾山林學校に於ては教務に於て重要なる位置につかれると共に、寄宿舍の舍監主任として頗る精勵せられた。性謹直で言葉少くあつたが快活で、圓滿なる性格は良く同僚や子弟に慕はれ幸福な生活を送られたが、教育者として眞に相應しい人であつた。君は何時も蔭にのみ力を盡し、勞は自ら求め、功は人に讓るといふ稀に見る美しい心情の持主であつたので、君の努力の大なるに比し其の酬ひらるゝ所甚だ少き憾があつたが、君は眞の教育者としての天分を信じ自ら慰めて居られたことゝ思ふ。

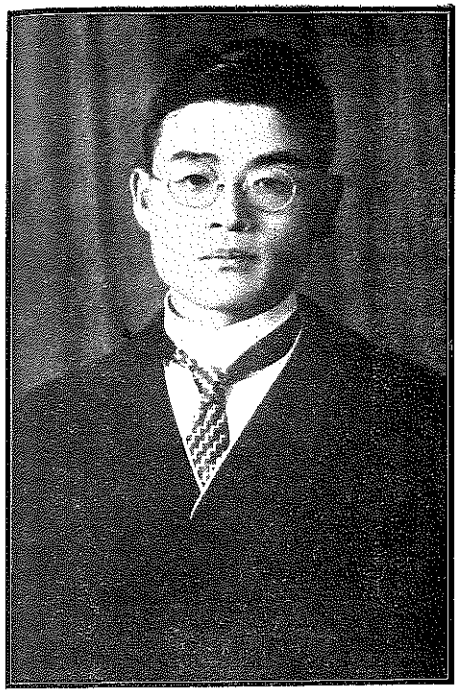
家庭の人としては明く平和で、又孝心の深い人であつた。大正十四年母君を亡くせられたが、母を思ふの情が厚く、十月頃より病が重くなつては、木曾より埼玉の母君の許へ土曜の夜行で出發し日曜の朝家に着き其の日の夕方立ち月曜の朝福島に着く樣にして、月に三回位見舞はれた。

君は平素碁や將棋等も多少やられた樣だが大して趣味といふ程のものでなく、唯散歩を非常に好まれた樣で秋の日曜等は數里もある山の方へ令閨と出かけることが屢々であつた。又君は基督教の信者でなかつたが令閨に奬めて信仰に入らしめられた。實に君の一生は純情の人として終始せられたのである。

今や秋風落莫として梢を拂ふ時此の掘き文を故山に眠る君の靈に捧ぐ、更に悲しみの新なるを覺ゆるのである。希くば君の靈よ永久に冥福あれ。

昭和五年十月三十一日

在札同期生　服部正相



故竹江重郎君

故竹江重郎君略傳

明治三十一年十一月八日　生る
大正六年三月十二日　北海道廳立札幌第二中學校卒業
同　年九月十一日　北海道帝國大學附屬大學豫科へ入學
同　九年七月五日　北海道帝國大學附屬大學豫科卒業
同　年九月一日　北海道帝國大學農學部畜産學科第一部へ入學
同　十二年三月三十一日　北海道帝國大學農學部畜産科第一部卒業
同　年五月十五日　北海道廳技手に任ず
同　給五級俸
同　産業部勤務を命ず
同　畜産課勤務を命ず
同　六月十八日　種牡牛檢査員を命ず
同　十三年六月一日　北海道産牛馬畜産組合技手を囑託す
同　年六月四日　北海道産業講習所講師を命ず
同　年十二月二十一日　給四級俸
昭和二年二月十九日　任北海道廳技師叙高等官七等

同　　河西支廳在勤を命ず
同　年三月五日　河西支廳第三課長を命ず
同　年三月十五日　叙從七位
同　四年五月二十日　陞叙高等官六等
同　年七月一日　叙正七位
同　五年三月十四日　給九級俸
同　　疾病死亡

故石塚吉朗君

故石塚吉朗君小傳

市立札幌病院の紅葉しはじめた庭木にショボ〳〵と雨がふりかゝる十月二日の朝、石塚君は亡くなつてしまつた。白衣の看護婦が忙がしげにゆきかふ朝の病院を後に、雨の中を今は動かぬ人となつた石塚君が黒幌の擔架で家へはこばれたのだつた。

廣くきれいに掃除された山鼻のお家では、久しぶりで「お父樣がお歸りになる」と云つて女中と寂しいお留守をしてゐた小さいお孃さん達が待つてゐた。わづか五つと四つの子供さんに若いお父さんの死は到底わからない。赤い服を着た遺兒都子さんと明子さんが「お客さんがたくさん來るのね」とはしやぎ廻るいぢらしさ。子供を見ると父なき將來の暗さが思ひやられ、あはれは一しほだつた。

死は其の人にだけ前にそれとない知らせをするのかもしれない。此春「これからは度々引越はしないつもりです、まかりまちがへば一生こゝにをります」とて庭もあり、何か事があつてもいゝやうな廣い座敷のある家に引越された。そして今年は草花をたくさん植ゑた。また晩年は蜜を集める蜂の如く小ぜはしく寫眞をとられた。逃げて行く牛を呼び無理矢理にうつしたり、むづかる子供さんをつかまへては寫眞をとられた。また「彼處もみてをかなければあ、此處も見てをかなければあ」と先の短かい御隱居さんの樣な事を云つて朝鮮迄行つて來たのだつた。風光麗しい彼のスイスの山々も多年君の見たがつたところ。

年來胃腸が弱かつたが、藥をポケットにヘンピな田舍への出張も苦にすることなく、よくその職にはげんだ。最近技師に任ぜられ、仕事も多い矢先き、之から一働きと云ふ三十臺で亡くなつたことは返すがへすも

惜しいことだ。

持病の致す氣むづかしさもあつたが、眼鏡から時々相手の目を親しげにみつめる癖などあり、夜明しもしかねない勢ひでつとめて明るく友と談笑した。駒をならべの郊外散策、旭岳への登山、旭川への騎馬旅行、思ひ出は樂しく、又悲しい。親思ひ、子思ひ、友思ひの君が最も頑固にして慘憺たる胃癌にあの樣に苦しめられようとは、燒火箸で胴をねぐられる樣だとうつたへ、立上がらんばかりの苦しみに幾夜眠られなかつた事か。再び立たんと自ら手術も求めてされたが凡ては空しかつた。人一倍人情に厚い君が父上、幼い子等、みごもれる夫人を思ひ、病と死に戰はれる姿は悲壯そのものであつた。

今や君逝いて一月、四方の紅葉秋日に美しく映ね、空また紺青に深く澄んで靜かな時だ。死別の寂しさはこの秋の風景の中にあつて一しほ深い。

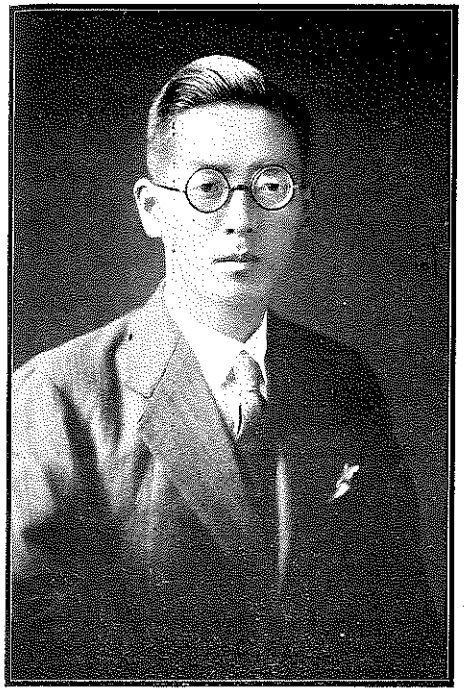
昭和五年十月三十日

眞駒內にて

大須賀國

略歷

一、明治三十一年四月三日鹿兒島縣に生る
一、大正六年鹿兒島中學を終へ北海道帝國大學豫科に入學す
一、大正十三年農學部畜產學科第一部を卒業す
一、卒業後直ちに森永三島煉乳工場に勤務す
一、昭和二年夏北海道廳畜產課に轉じ專ら酪農方面を擔當し昭和五年八月北海道廳技師に任ぜらる
一、昭和五年十月二日市立札幌病院に於いて病死。享年三十三。



故澤田正見君

故澤田正見君を悼む

昭和五年九月二十九日澤田君が出張先帶廣で急死せられたことを聞き愕然とした。餘り意外の事なので、初めは何の事だか判らず、何だか本當の事と信ぜられなかつた。無理もない、つい少し前元氣でやつて來て「暫らく水稻經濟調査で出張して來るから宜しくたのむ」と我々仲間に挨拶して出かけた許りなのだから。

而も夫は事實であつた。我澤田君の悲痛極まりなき死は儼然として事實であつたのだ。あゝ！。

齡僅かに三十有一才、洋々たる未來を有ち乍ら、近年愛兒達を失ひ眞に御氣の毒な御兩親。それにも增して悲痛なのは今春新婚の夢未だ圓らかに、今や君の愛の結晶を胎内に宿しつゝある愛妻を殘して忽焉として天切せられやうとは。あゝ！。

我々は悲しみに身も心も轉倒せる是等の人達を慰める術を知らない。唯衷心から哀悼の微意を表することお出來る許りだ。

故澤田君は末次郎氏の長男として明治三十三年一月札幌市外上白石村で呱々の聲をあげ、札幌市中央創成小學校を經て札幌第一中學校に入學し、同校卒業後、大正七年北海道帝國大學豫科に入學され、次いで農學部農業經濟學科に進み、螢雪の功空しからず、少壯農學士として大正十四年北大農學部を卒業し、實社會に踏出されたのである。

僕は偶々澤田君とは中學から北大を卒業する迄一緒で御つき合を願つてゐたが、終始畏敬すべき友人として接してゐた。

君は一言にして云へば非常に強い個性を具有してる人だつた。夫もよく在り勝のいやに小さくこち〳〵固まつた融通の利かないやうなものではなく、押の強い、腹の出來た、男らしい、而も見識の高いものであつた。

我々は小學校の末期に始めて相識つた。當時の君は「克く學び、克く遊ぶ」眞に良い子供らしい子供だつた。今で云ふスポーツボーイだつた。而もクラスを脊負つて立つ野球の選手だつた。確か投手をやつた筈だ。要するに君は夙に仲間でのプリリアントな存在だつたのだ。

中學校時代も引續き明朗而も勤勉な模範的な生徒だつた。矢張りスポーツマンとしては重きをなし、四年位の時水泳（當時は觀海流の遠泳）五里の免狀を貰つた。僕などは何事によらず人後に落ちる方だから、野球でも、水泳でも君に手解きをして貰つたもので、野球で君が投手をやれば僕は三塁とか、よくて捕手になるし、君が五里を泳ぐ時分には僕はやつと一里の免狀を貰ふと云ふ狀態だつた。

豫科時代から君の魂の發展は目立つて來た。又仲々所謂勤勉家になり、學業の成績も大變佳かつたが、三年の頃不幸にも網膜剥離症に罹つて一年休學されたのは御氣の毒だつた。然し間もなく全快されて其後何等異狀あることを聞かないので蔭乍ら欣んでゐた。君の多角性は此頃から徐ろに光芒を放ち始め、南須原君兄弟の主宰してゐた文藝雜誌「歩み」社同人として活躍を見せた。僕は折々同誌を見せて貰つて、良く解らなかつたが只偉いものだと思つて無性に感心した。然し君の好みは文藝よりも思想方面にあつたらしく、次第に其方へ轉向して行つた。經濟入學當時の事だ、此の時分から佐藤季治君達と共に京大の邊見重雄君と深交を結び、思想的に可成共鳴した處あるものゝ如くであつたが、君の夢を追はぬ、プラクチルな性格はマルキシズムを小兒病的なりと洞察したのであらうか、所謂善良なる學生の本分を守つて妄りに動かず、爛望すべきカムラを學徒として農業經濟學研究に篤念し、他日の活躍に備へたのである。斯くして君の素質と其の研究心の旺盛とは益々其の光を放ち、卒業論文「北海道經濟史概論」の如きは先人未踏の領域に屬するもので、北海道の一般的經濟史に關する文獻として、後進研究者を啓發すること多大なる點に於て、指導の任に當れる中島九郎博士の推賞措かなかつたものである。

又他面君は其の強靭なる意力と、北國人個有の蒼白の熱情、加ふるに社會科學の洗禮を經たる秀れたる識見とを以て自から學生社會に重きをなし、或は辯論部員として活躍し、或は文武會庶務主任として學園自治行政に才腕を揮ふ等行くとして可ならざるはない才能を示し、將來有爲の邊材として衆望を擔つてゐた。

かうした充實した學生々活を卒るや、君は直ちに臺灣の新高製糖會社に入社され、瘴煙蠻雨の彼地で奮闘されることになつた。居ること滿四年餘、其の間の事は何分にも遠隔の地の事として委しく知る由もなかつたが、僕は歸札後の君の話の一班に依り、君が彼地の製糖事業なるものや、實業界の表裏を如何に冷靜に、大局から達觀してゐたかを傾聽したものである。

會社で既に相當重用されてゐたけれども、家庭の事情已を得ず昨年五月會社を辭して歸鄉し、父母に孝養を盡しつゝ再び母校中島教授の下に、臺灣製糖業にて實地經驗せる處を學問的に整理し、旁々一般農政問題に沒頭してゐたが、同年七月北海道廳土地改良課に勤務されたのである。

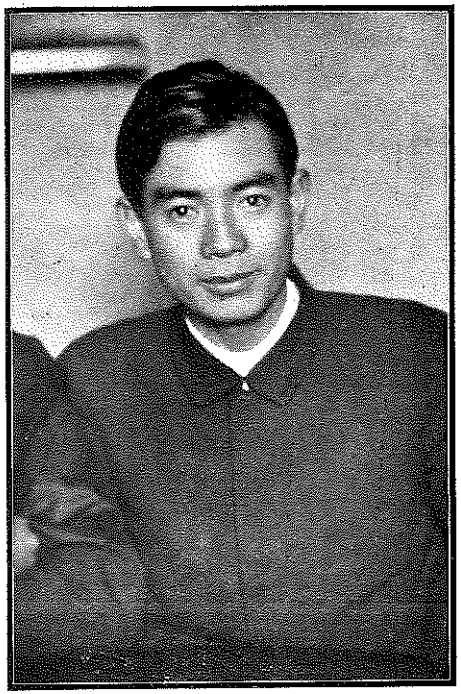
其後は合ふ機會は多かつたが、常に元氣で、常に勤勉な、徒つて上司同僚の信愛厚く前途有望な青年技術者としての君を見出すのであつた。夫は新任未だ日淺い君が折にふれて示された本道に於ける半官半民營の灌漑工事會社の大調査に關する意氣込や、新任後間もなく北海道の米消流狀況調査に關する好箇の印刷物を編纂した事や、又最近問題の土功組合區域内の水稻經濟調査の立案者であつた事等でも覗ひ得るのである。

而も本年三月には溫かき家庭を作られ等、幸福の女神は恰も君の爲にのみ微笑むかの如くだつたのに。
あゝ！　突如として出張先で死去せらるゝの報に接しやうとは!!　歸らぬ旅に默々として淋しく赴かうとは！
秋雨蕭やかに、秋は淋しく闌ける。筆は餘りに拙く、畏友澤田君の全貌を寫し、哀悼の情を盡し離きを恨むが、一人燈下に坐つて瞑目すれば君の面影はそつくり眼前に浮んで來る。
あゝ、澤田君よ！　爲すべき多くを殘しての死は嘸心殘りもしたであらう。けども我々幸ひ君の同窓とし、君に訓へらる處の多かつた者邊は及ばず乍ら背なして立派に君の埋合せをつけてやるよ。
さらば、澤田君の英靈よ！　靜かに、安らけく、眠つてくれ！。

昭和五年十月三十一日夜

同期生一同に代つて

保　科　小　一　郎　識



故牧野要三君

故牧野要三君小傳

昭和四年九月廿八日は、君が異郷「ブラジル」の野に幾多の希望を殘し乍ら逝かねばならぬ運命の日だつた。君があの元氣な希望に輝く聲で、お別れの言を交して神戸の港を發つたのは昭和二年六月四日だつたのに、その後二ヶ年半足らずの月日しか經過してゐない今日、君の訃に接するとは夢にも想像することの出來なかつた一大痛恨事だ。

君は明治廿五年十月十六日高松市北古馬場町牧野廣太郎氏の六男として生れ、同地中學を卒業して大正九年直ちに北大豫科に入學し、大正十五年三月農學部農學科を卒業した。

嚴父は子弟教育に對して絶體放任主義の人だと聞いてゐるが、君の性格には全く物にこだわらぬ自由奔放な處があり、型にはまつた我々から見ると奇異にさへ思はれる事を平氣でやつてのけた。習慣とか、義理とかは最も君の忌む所のものであり、束縛された生活より脱することが君の唯一の願望であり、目的でもあつたのだ。そんな風な性格と日本の切迫した社會狀態とを結び付けて、君は安住の國は「ブラジル」也と決心したとも云へる。決して「黄金の花咲く五萬町」を夢見たものではない、凡ての人が協力一致して自由に働き、人を怨まず恨まず各人各自その生活を樂しみ度いのが君の本心であつて、企業的農業經營は君にとつては第二段の目的でしかなかつたのだ。

君は義理習慣等と云ふことに無關心であつた反面に於て飽く迄も友情に厚く、その友情たるや心底よりあふれ出づるの眞情である。

教室に於ける君は我々になくてならぬ愛嬌者の一人であつた。君の輕い「ユーモアー」に富んだ一句は我々をどんなに嬉ばした事か。雜談は又君の得意とする所、我々廿五名の相當多數の「プロパー」同期生を一つの團欒の樂しみに迄纏めて呉れる者は君だつた。こんな陽氣な反面に君には又思索の時間が必要だつたのだ。雜然雜音の内に居て君は平氣で一つの事を考へ續け得る丈の餘裕があつた。之は君の頭腦の如何に透徹なりしかを物語るものである。試驗勉强は君にとつては一つも苦しみではなかつたのだ。人と談笑し乍ら勉强し得る者もあまりあるまい、君は談笑し乍ら讀書し而かも周圍の人に一つも惡感を起させない。讀書し乍ら人の話しを順序よく記憶してゐて、時に例の警句を放つて人を笑はせる。こんな事もあつた、大學第一年目の學年試驗に君は愛驗しなかつた、身體具合が惡かつたのか、例の束縛感を感じたので止したのか、その原因は忘れて仕舞つたが一課目も受驗しなかつた、我々一同は非常に心配してゐたが君は却つて平氣で二年分一緒に受驗するのだと云つてゐた。遂に一年は廻つて受驗期は近まつて來た、君もその時は一寸困つた樣な顏をしてゐたが見事全部パスした、而かも二年分一緒に。

君には色々な癖があつた。物を考へる時爪をかむ事と、一人歩きする時に口笛を吹くことは誰でもが氣付いてゐた事だろう。それが何かしら君に親しみを感ぜしめるものだつた。

君は又旅行がすきだつた。スキー、山登り等でも牧野式とでも云へる言行が多い。音樂、映畫に對しては單なる娯樂の域を脱して、純然たる趣味としてよく之を解してゐた樣だつた。

君が「ブラヅル」行を決心したのは大學三年目の三學期だつたが、その頃我々は集まると就職の話をした。君の性格として月給取りは頭から問題にせず、獨立自營を目標として進まねばならなかつたのであるが君は遂に「ブラヅル」行を決心した。卒業後東京出て出發近く迄佛語の復學に通ひ、書間は「ブラヅル」外情の研究に夜讀してゐた。

渡伯後君は語學の必要を感じたのと氣候に身體を馴らす爲、直ちに「Santo Amaro の Collegio adventista」に入學して、午前中は學課、午後二時間農場實習に汗を流し身體を煉る事をも忘れなかつた。その後一時北大の先輩たる揮旗氏農場で指導を受け愈々中央線（リオとサンパウロ市を結ぶ線）Mogy das Cruzes に土地を購入し獨立（の第一歩を踏み出したのだ。この土地の所有收獲得に就ては非常に頭を惱ましたらしく、正金銀行「リオ」出張所に御勤務の廣瀬氏（時任教授の女婿）はこの問題に就ても非常に盡瘁して下さつたのだ。

斯くして君は理想の具體化に突進す可く、開墾に從事して主に園藝作物の栽培に力を入れたのだが、凡ては君の意志通りに運ばれず、一難去つて又一難、更に君は病魔とも闘はねばならぬ身となつたのだ。昭和四年二月十六日付の君の書簡は最も悲痛なもので、唯收獲を待つばかりに手を入れた圃場と別れて、明日より「サントス」に魚を喰ひに行く（療養の意）のだとあり、而かも一二年田畑を空けねばならぬと附記してあつたのは、君の病氣が既に重態だといふことを物語つてゐたのだ。而しどうして君の死を想像することが出來るだろう。

京都にある君の令兄の語られる處に依れば、「サントス」の病院は肺患專門の病院であつて、君は入院後極力闘病に力めたが病勢既に重く、幾度か喀血し全治の見込更になく、病院より退院を命ぜられ三十九度からの高熱の身を自巳の開拓せる Mogy das Cruzes の農園に運ばれ間もなく息をひいたのだと。

雄圖中道にして座折せし君の心情か如何。

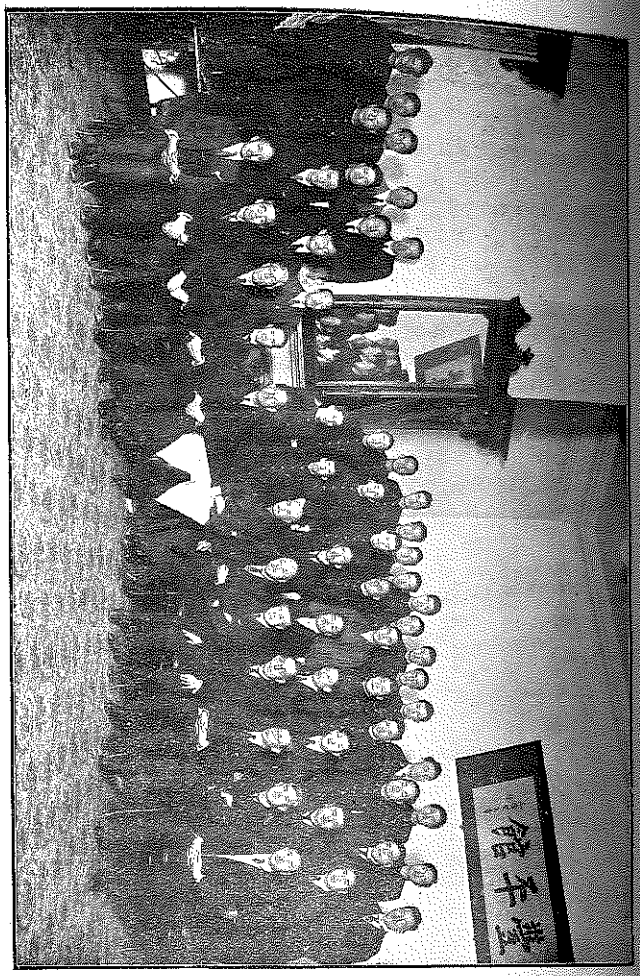
されど君の骨は伯國の土地と化し「パイオニア」としての責任を完全に果されたものだ。而かも君と血を

別かたれたる令兄は、君の遺志を繼ぐ可く昭和五年六月七日神戸をあとに君の建設した Mogy das Cruzes の農園へと向はれたのだ。

君の冥福を祈りながらこの稿了る。

昭和五年十月

吉村季貞識



札幌同窓會第五十二回報告

本部記事

一、總會記事

昭和五年一月卅日（土曜）

出席者（A、B、C順）

安孫子孝次　柏澤保　荒又操　藤田經信　福山伍郎
福山甚之助　權平昌司　半澤洵　花田綠朗　林浩植
廣田實　星野勇三　市村三郎　井口賢三　池田實
伊藤半右衛門　伊藤光治　伊藤誠哉　笠原十司　川村源四郎
北村義重　黃金井解三　小谷武治　小山小一　松村松年
南鷹次郎　御園生義一　三田村健太郎　三宅康次　中島九郎
中村精一　中村幸次　中村幸彦　野口祥昌　小田切榮三郎
小川二郎　沖野丈夫　尾崎卓郎　大澤正之　佐々茂雄
佐々木斌司　佐々木準長　佐藤一雄　佐藤昌介　佐藤退三
澤田英吉　赤城五十羽　佐田芳雄　島善隣　白濵潔
高倉新一郎　高松正信　武田信基　高井泉　田町以信男

多武保守夫　田村芳祐　田中一郎　手島寅雄　時任一彦
戸津高知　常松榮　内田登一　和田爲康　若泉久泰
若狭清治　渡邊兵右衛門　渡邊侃　山口翠　山田勝伴
山田忍　吉川宥一
計　七十二名

昭和四年會計報告

(一) 概說

本會々計報告は昭和四年一月より同年十二月まで一ケ年間の經費收支勘定にして、之を資金部及經常部に分ち經理す。其間經費に餘裕なき場合には資金部經常部互に融通して經理せり。

(二) 資金部

資金部收入金壹千九百拾四圓九錢參厘、支出金壹千四百拾壹圓四拾七錢にして差引金五百貳圓六拾貳錢參厘は翌年度に繰越すものなり。其費目左の如し。

收入之部　　收入高

一金壹千九百拾四圓九錢參厘

內譯

金參千貳拾七錢　地方會員費
金四百參拾圓八拾錢　若狭會員費
金九拾參圓　歡迎會費
金四圓九拾九錢　振替利子

支出之部　　支出高

一金壹千四百拾壹圓四拾七錢

內譯

金貳百拾九圓五拾八錢　通信費
金八百六拾貳圓　印刷費
金貳百八拾圓參拾五錢　歡迎會費
金九拾四錢　振替手數料
金拾五圓　寫眞代
金參拾參圓六拾錢　雜費

(三) 經常部

經常部收入金貳千七百拾壹圓貳拾參錢貳厘、支出金壹千貳百貳拾圓六拾七錢にして差引金壹千四百九拾圓五拾六錢貳厘は翌年度に繰越すものなり。其費目左の如し。

收入之部

一金貳千七百拾壹圓貳拾參錢貳厘　　收入高

內譯

金九百參拾四圓六拾四錢貳厘　前年度繰越高
金六百五拾七圓七拾貳錢　貸地料
金參百貳拾貳圓　在札幌會員費
金八拾四圓　總會費
金參百九拾九圓　拓殖債券利子
金貳百八拾貳圓七拾六錢　定期預金利子
金貳拾壹圓拾壹錢　當座預金利子
金拾圓　歡迎會費

支出之部

一金壹千貳百貳拾圓六拾七錢　　支出高

內譯

金百五拾六圓　書記給料
金百貳拾圓　傭人給料
金貳百圓　雜費及手當
金貳百七拾八錢　雜費
金貳拾壹圓五拾錢　電話料
金百參拾八圓拾錢　諸稅
金參拾六圓九拾錢　所得稅
金貳百拾五圓　總會費
金七拾七圓參拾錢　獄費
金四拾圓　迎會費
金參圓　玉突臺稅
金六拾壹圓八拾錢　衛生費
金拾參圓九拾四錢　集會費
金五拾五圓九拾九錢　資本利子
雜費

(四) 土地

本會所有地　札幌市北三條西七丁目貳番地

一、宅地　七百八拾參坪

(五) 財產

一、建物賣却代金　壹萬壹千四百圓(拓殖銀行定期預金)

一、金盃三ツ組　壹個

一、電　話　壹　臺

（六）保管書類

一、土地臺帳及會計に關する書類

役員改選

役員改選の結果左記之通當選す

會　長　南　鷹次郎

幹　事　時任一彦　渡邊侃

評議員（半數改選）伊藤誠哉　山田勝伴　平塚直治

三宅康次　中島九郎

昭和六年度札幌同窓會總會を一月卅一日（土曜）午後五時より北大職員集會所に開催す。出席者左の如し（ABC順）

明峰正夫　安倍慎　渥美樟雄　苑又操　榎本鈴雄

福山伍郎　福山甚之助　福士貞吉　櫂平昌司　星野勇三

[illegible]

池上三次　井関清　河野重道　小山外一　今田清二

小谷武治　亀井東次　北村義重　木下四十生　川村源四郎

工藤良忠　神田八郎　松村松年　前川十郎　御園生義一

三田村健太郎　宮部金吾　宮川直衛　南鷹次郎　森本厚吉

松田武雄　中村精一　中村幸彦　野口祥昌　中島九郎

中村幸次　中島顯三　尾崎卓郎　及川寅雄　小田切榮三郎

澤田英吉　自濱潔　佐々茂雄　里正義　澤山智

重岡義雄　笹三津彦　佐藤一雄　佐々木斌司　佐藤龜之助

時任一彦　手島寅雄　常松榮　高橋榮治　田所哲太郎

田町似信男　田村芳祐　武田志磨之助　高松正信　栃内吉彦

戸津高知　多武保守夫　高岡熊雄　高倉新一郎　内田登一

上田秋光　若狭清治　若泉久泰　渡邊侃　和田爲康

渡邊磯治　山本健吾　吉野至德　山田勝伴　梁田參

山口翠

昭和五年會計報告

（一）概　說

本會々計決算報告は昭和五年一月より同年十二月まで一ヶ年間の經費收支勘定にして之を資金部及經常部に分ちて經理せり。

（二）資金部

資金部收入金參千六拾圓八拾五錢參厘、支出金九百九拾參圓參拾五錢にして差引金貳千六拾七圓五拾錢參厘は翌年度に繰越するものなり。其の費目左の如し。

收入之部

一金參千六拾圓八拾五錢參厘　收入高

內譯

金五百貳圓六拾貳錢參厘　前年度繰越高
金貳千七圓貳拾錢　地方會員費
金四百四拾六圓　在札會員費
金拾貳圓　準會員費
金八拾四圓　歡迎會費
金九圓參錢　振替貯金利子

支出之部

一金九百九拾參圓參拾五錢　支出高

內譯

金參百八拾壹圓參拾六錢　通信費
金貳百貳拾壹圓　振替拂込料
金四錢　歡迎會費
金參拾錢　振替拂込料
金拾五圓　寫眞代
金參圓參拾錢　集金書用紙代
金七拾圓貳拾錢　集委託料
金貳拾九圓八拾六錢　集金拂込料
金五拾四圓貳拾六錢　雜費

（三）經常部

經常部收入金參千貳百六圓六拾參錢貳厘、支出金壹千八拾八圓貳拾七錢にして差引金貳千壹百拾八圓參拾六錢貳厘は翌年度に繰越するものなり。其の費目左の如し。

收入之部

一金參千貳百六圓六拾參錢貳厘　收入高

內譯

金壹千四百九拾圓五拾六錢貳厘　前年度繰越高
金六百八拾九圓四錢　貸地料
金參百五拾八圓　倶樂部維持費

金七拾圓　總會費
金五百九拾圓參拾八錢　定期預金利子
金八圓六拾五錢　當座預金利子

支出之部　支出高

一金壹千八拾八圓貳拾七錢

內譯

金壹百五拾六圓　書記給料
金壹百貳拾圓　傭人料
金貳百參拾五圓　報酬及手當
金九拾四圓　電話料
金壹百五拾七圓六拾八錢　諸所得稅
金參拾圓拾五錢　總會費
金壹百四拾壹圓拾錢　獸迎會費
金拾六圓七拾五錢　衞生費
金參圓　集會費
金參拾九圓拾錢　印刷費
金拾貳圓八拾五錢　雜費
金參拾貳圓五錢　賣本利子
金六拾六圓七拾九錢　雜費

(四)土地

本會所有地　札幌市北三條西七丁目二番地
一、宅地　七百八拾參坪

(五)財產

一、建物賣却代金　壹萬壹千四百圓(拓殖銀行定期預金)
一、金盃三ツ組　壹個
一、電話　壹臺(五〇八番)

(六)保管書類

一、土地臺帳及會計に關する書類

以上

役員改選

役員選擧の結果當選者左の如し。

會長　宮部金吾

幹事　時任一彦　渡邊侃
評議員　半澤洵　田所哲太郎　高松正信　安孫子孝次
明峰正夫　評議員三宅康次氏補欠　高岡熊雄

二、新入會員歡迎會

昭和五年三月卅日（日曜）午後五時より本年卒業の新會員たるべきものの招待會を豐平館に開催す。當日出席者左の如し。

會員

明峰正夫　青葉萬六　花田綠朗　半澤洵　平塚直治
伊藤光治　笠原十司　小華和忠士　松村松年　三宅康次
宮崎健雄　中島九郎　中村幸次　中村幸彦　根本通美
尾崎卓郎　佐藤昌彦　佐藤昌介　白濱潔　高橋榮治
高松正信　高岡熊雄　田町以信男　時任一彦　若狹清治
上原轍三郎　渡邊侃　山田勝伴　（計廿八名）

新に會員たるべきもの

緒子浩一　井口眞五　栗田義郎　増尾伊助　大村清之助
澤山大千穂（以上農學科）　高橋實　安田泰次郎（以上經濟學科）

佐々木敏也　島田昌一　明井篤爽生（以上生物學科）　藤原一夫
五百木次衛　伊東博　伊藤泰三　岡部勇（以上化學科）
石橋道助　野中孝次（以上林學科）　安田丙五郎　峰谷元三郎
伊藤豐治　坂本彌直　田川潔（以上畜産學科第一部）　青野哲男
増田米一　田中愛雄（以上畜産學科第二部）　（合計廿六名）

三、弔詞弔電發送

昭和五年一、二四鈴木寧君の令嚴　同日細田清市君　同一、二五高木直一君　同二、八中島廣吉君の母堂　同日中松喬三郎君令閨　同日石橋朗君　同三、二〇山極三郎君の令嚴　同三、二一竹江重郎君　同三、二八內村鑑三君　同四、一六蓮見道太郎君の令閨　同四、三〇武信由太郎君　同六、一八橋儀一君　栃內禮次君令嚴　同六、二三安積一郎君令孃　同六、二四栃內壬五郎君母堂　同六、二五湯淺伸夫君令閨　同七、一山口正造君　同七、一七佐藤清君令閨　同九、一立木小七郎君令息　同九、五平野他喜松君　同一〇、一澤田正見君　同一〇、五石塚吉郎君　同一〇、六大橋武雄君　同一〇、八大矢敏範君令嚴　同一二、七和田太吉君　一二、一八中根明君　一二、二二岡田豐治君令閨　昭和六年一、二八鈴木寧君　同二、一〇平塚直治君母堂　同二、一五大關雄只、同信雄君令嚴

四、受信

本會長より舊札幌農學校教頭、故ウイリアム・エス・クラーク先生令息、ヒューバート・ライマン・クラーク氏の來札を記念し、故ウイリアム・エス・クラーク先生胸像を贈りたるに左の謝狀ありたり。

April 28, 1929.

On board S.S. President Van Buren

My dear Prof. Minami,

I want you to express to you in writing, and through you the Sapporo Alumni Association, my very profound gratitude for the gift (the) Association has made to me of a bust of my father, a reprica of the one on the campus at Sapporo, I sincerely appreciate not only the generosity of the gift but the honor you have thus done me, and I can assure you that this bust will always be treasured by me, until I am released from the flesh, and after that my son William Smith Clark II. will continue to treasure it with all its happy associations.

With renewed and very sincere thanks, I am

yours most cordially

Hubert Lyman Clark.

木會宛年賀狀を賜りたる芳名。（ABC順）

昭和五年

阿部晃　赤松勳　秋濱浩三　秋山熊次郎　安藤威
安東義喬　青柳完治　荒川重秀　淺井熊作　淡島敬助
朝倉金彦　遠藤勘三郎　藤根吉春　藤本吉之助　舟茂宣雄
双木康　玄地誠輔　峰喜市　濱名有義　原田豊次
長谷川博一　長谷川吉雄　長谷川雅夫　畠山成夫　早川其一
越後屋一郎　越後屋一郎　越後屋一郎　池田一郎　池上三次
池原像　今井國四郎　色部米作　石橋三郎治　石川博見
石川公策　石岡逸郎　伊藤一雄　伊東祐夫　岩波六郎
岩崎二三　鍵和田基男　神屋久次　菅菊太郎　金森貞吉
神田勝玄　加藤孝三郎　加藤茂雄　河田力　河田憲治
川名一郎　木田一郎　菊地謹爾　木村謙介　木村喜太郎
小林正視　行田又三郎　小池俊三　駒井德三　近藤一二
近藤仙吉郎　小藤孝德　草場榮喜　久保隆三　工藤祐直
工藤檜太郎　熊谷貞治　工藤藏之助　倉田武比古　黑澤艮平
町村金彌　前田勝美　槇忠一郎　正見透　增田貞吉
松井虎太　松山茂助　松澤辰三郎　宮川直衛　宮脇勝一
宮城孝治　三輪勇四郎　三輪密揚　三浦雲成　溝口忠男
森順平　森岡光信　本橋平一郎　村井隆治　村越銃之輔
村山吉三郎　長崎常　中原藤一郎　中村勝士　中村幸次
中尾節藏　中根壽　中根明　仲谷一馬　成田軍平
成田昌治　二瓶直治　野田實　小田切榮三郎　小田代慶太郎
大光寺毅夫　大越覺二郎　奥田彧　岡本半次郎　大久保七熊
大澤榮太郎　納富喜雄　柳內義之進　齋藤勇　坂本松次郎
清水郁藏　澁谷紀三郎　杉本茂一　杉本昌五郎　杉山章造

田中享藏　谷越正照　田澤博　栃内壬五郎　富田良太
内田瀞　宇留野祐壽　渡部太郎　渡部甚作　山崎義政
米山豐

昭和六年

阿部六一郎　阿部旻　赤羽雄一　赤松勳　安藤威
青柳定治　荒川重秀　荒木英吉　荒木一夫　朝倉金彦
淡島敬助　粟野定次郎　相田幾次郎　大光寺毅夫　遠藤勘三郎
副島昌　双木康　後藤勇　藤井正通　藤本吉之助　藤村行吉　降矢壽夫
早川萬一　樋口櫻五　濱名有菁　長谷川博一（浩）　長谷川悌次
井出梓　早川萬一　樋口櫻五　濱名有菁　長谷川博一（浩）　長谷川悌次
石川博見　石津半治　池原偉　池澤光治　廣田直之　井上陽之助　堀三千雄　石井達三
鍵和田基男　加藤孝三郎　色部米作　岩波六郎　片岡殖
河田力　川江秀雄　加藤木保次　加藤茂雄　川口義一郎
小林一勝　小林淳吉　木田一三　木村喜太郎　木村繁四郎
近藤卷藏　小林淳吉　小林正視　行田又三郎　黄金井解三
厚楊榮喜　小藤孝德　小杉方也　工藤楢太郎　工藤藏之助
松澤辰三郎　増田定吉　間山萬之助　三村重憲
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

宮脇勝一　櫻井泰三　櫻岡光信　村山正之　村田吉三郎
中川貫造　中村勝士　四山常一　中田重勇　伊谷一馬
長野多滿一　内藤乾藏　成田軍平　成田昌治　二瓶直治
野田實　野呂莊次郎　野澤逸一郎　沼田正直　岡元輔
岡田虎輔　岡崎文吉　小田代慶太郎　大橋秀吉　大久保亮
大久保敬　大久保七熊　小野常治　小寺甲子二　大貫吉之助
大島常喜　太田武五郎　鈴木國太郎　齋藤謙吉　坂本敏雄
坂元晃佑　佐々木元夫　佐々木義正　佐藤勇　佐藤龜之助
佐藤憲三郎　佐藤司　佐藤利一　佐藤隆太郎　仙波繁雄
澁谷勝太郎　島田幾　島田義雄　清水元太郎　清水郁藏
清水時雄　關又一　末田新松　末光信三　杉本茂一
鈴木讃　槇忠一郎　竹内豐　丹治七郎　田下武廣
栃内壬五郎　柳内義之進　豐田久馬彦　鶴崎久米一　筒井武
露木格　内田瀞　渡部甚作　渡邊顯　鷲尾弘圓
山田玄太郎　山尾三千雄　山下勉　安田英吉　吉田太郎
湯田勝治　周建侯

田中志雲氏よりの通信

昭和五年七月四日　群馬縣立小泉農殖學校（邑樂郡小泉町）
群馬縣山田郡休泊村龍舞（太田局區內）　田中志雲

謹啓梶雨明炎熱俄に烈敷相成候處本部各位には愈々御清適奉賀候扨我々實業學校長同人は先般文部省招集の會議に參列之機を利用し六月十七日本郷龍岡町の旗亭豐國に於て懇親會を催し大にメートルを揚げ申候當日の出席者氏名等別紙御一報申候但し根岸元吉氏より既に通信有之候はゞ拙文は御取棄相成度候也

實業學校長同人懇親會の記

六月十五日新宿第六中學校に於ける農業學校長協會總會の日、我等同人は去年十月相別れた時の顏を提げて復相會した。東京支會が此機を利して懇話會でもやつて呉れるだろうかなあとの聲は暗默の間に誰もの胸に響いた。翌十六日になつてもまだ其氣振が見へない。十七日になつてはよし我々同人丈けで一つやろうとの叫が天の一角に起つて忽ち出田元老を動し、根岸幹事の奔走となつて急遽回章が廻り、五時頃には續々と大學南門外の旗亭豐國に陣取つた。雨後の夕陽は幽谷の樣な庭園を照して清新の氣が堂に滿ちた。此氣分の下に談論風發は申迄もない。殊に井上督學官の往年やり希望やり抱負に我々の好指針となつた。此會を永久に繼續したい上の希望は勝せ

ずして一致し、忽ち維持費を積立つる議も起つて即座に決行された。規約は他日推敲する事として先當り幹事長に出田氏、幹事に根岸氏が推された。後で聞者が一番お江戸に近い（小川良五郎氏此日欠席）との故を以て幹事に捕り會計始末迄托された。此日は何分突嗟の回章であつたので通知漏が多少あつたのは殘念であつたが、それでも無慮四十七名を算したのは盛況と云つて差閊あるまい。當日の出席者左の通り。（次第不同）

秋山熊次郎　馬場庄介　遠藤勘三郎　藤根吉春　平野善嗣
堀田喜滿　春田光治　出田新　石川保治　藤本吉之助
蠣崎知次郎　北澤小八郎　小池俊三　工藤祐直　工藤藏之助
牧野環　村山正二　眞山伊重郎　向井武　井上陽之助
根岸元吉　双木康　西村治己　野田信興　大橋秀吉
大平精一　大久保敬　大澤榮太郎　岡崎鹿衛　薩山忠夫
中村壹三　峰喜市　中村正壽　增村嘉門　齋藤永治
佐藤陽太郎　芝原彦十　坂田保喜　鈴木郷司　鈴木好一郎
高村儉治　田中愼　田中亨藏　鈴木正夫　梁田斌
柳田玄俊　山本猶市　以上

河村九淵氏より通信

拜呈各位益々御清勝奉賀候却說武信山太郎兄豫定の如く閻魔の廳より召集を被受候段痛惜の至に

候囊には内村鑑三兄の遠逝あり第一期は生存者七人死亡者七人、第二期は生存者四人死亡者六人、第三期は生存者七人死亡者十一人、第四期は生存者六人死亡者十一人と相成候御同樣氣分を若々しく保ち心身を飽く迄酷使致して彈力を增し長命を保つと共に生ある限りは活動力を增進致す樣工夫且つ努力致さねばならぬ事と存候

亡き同窓の小傳は一頁大と御限定被下候處幾分の餘地を被與候段多とする處に候然るに經費節約の爲薄くして貧なる紙質を被選候段遺憾の至に候

從來同窓會の小傳を精査致して小生は得る處實に多大なるを覺へ候又種々なる教訓を得居候

（一）其が國家社會に貢獻せる顚末の概略を明かにして一面に於て其功勞を記念し且表彰する事

（二）同窓の二字には深き意義ある事及友情の極めて貴重なる事を知らしむる事

（三）小傳を綴る者にして涙の裡に筆を走らせぬ人は一人もなかるべく存候

事、小傳を綴るに當りては筆の先より血と涙が迸つて筆者の友愛の熱情が極度に發揮せらるゝ

（四）同窓は相協力して學術に事業に發憤努力を以て成功を期せねばならぬ事

等等等深甚な意義を有し居候事と存候何卒愼重御評議被下度切望仕候

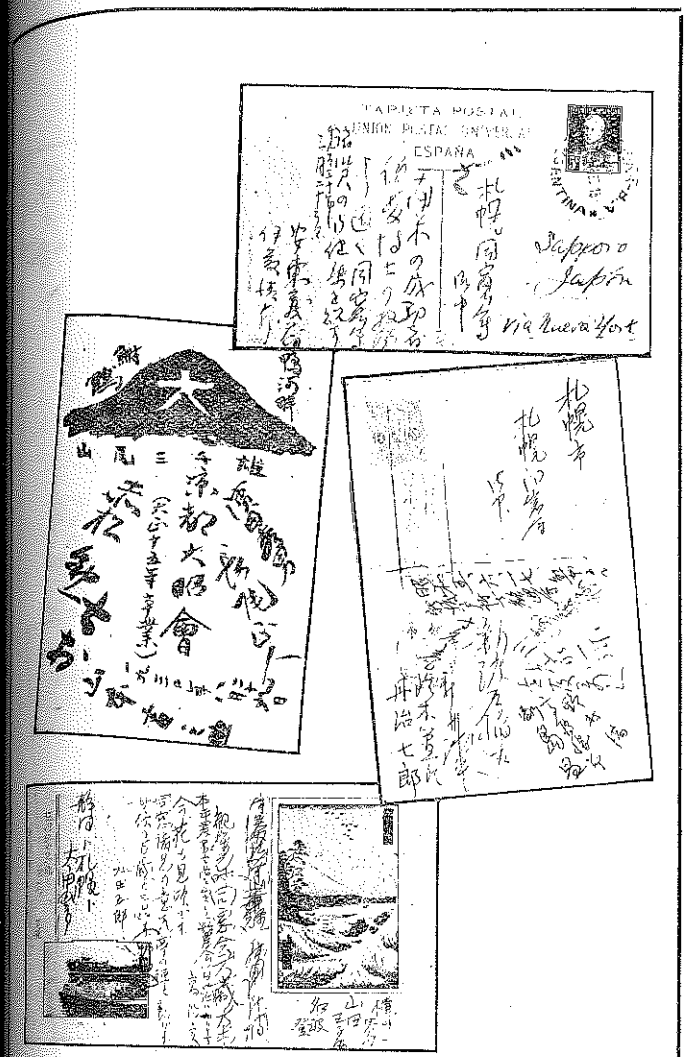
過日來在札同窓諸君の御懇情に浴し深く感激致居候成爲奮勵致して御恩情に報ひねばならぬ事と存候

河村九淵

五月十日

同窓會幹事御中

同窓中功勞者にして死亡せる人の傳記を單行本にして世に出だす事は如何のものに候哉差當り伊藤一隆君、廣井勇君、内村鑑三君、渡瀨寅治郎君、志賀重昂君等の傳記は是非世に出し度存候是は寄附金によるを便法と存候是又御一考被下度候



臺灣支部記事

昭和五年度定期總會概況報告

時　日　昭和五年九月三十日午後五時半

場　所　臺北市鐵道ホテル

出席者

大島、三宅(勉)、素木、澁谷(紀)、山田、磯、鈴田、石渡、深谷、三松、山本(亮)、奥田、三宅(捷)、櫻井、鈴木、安藤、加納、後藤、山岸、下斗米、澁谷(常)、犬飼、東海林、大野、三輪、加茂、平林、鍵和田、眞鍋の諸氏二十九名

一、開會之辭　大島支會長

二、庶務報告　東海林幹事より別記庶務報告

三、決算に關し承認を求むる件竝會計報告　三輪幹事より別記決算竝會計に關し說明し共に異議無く承認可決

四、議　事　議案無し

五、役員改選　役員（支會長を除く）改選の結果左の如く決定（總投票數四十八）

評議員　吉田碩造氏、金子昌太郎氏、三宅勉氏、素木得一氏、澁谷紀三郎氏、山田拍採氏、黑田秀博氏、柳澤秀雄氏、奥田彧氏、鈴木進一郎氏

會計監督　鈴田嚴氏

幹事　下斗米政行氏、露木格氏

南部幹事　三浦博亮氏

六、閉會之辭　大島支會長

昭和四年度（自昭和四年十二月二十五日至昭和五年九月三十日）庶務報告

一、重要會務

（一）合同年賀狀發送に關する事務

（二）祝電及弔電に關する事務

（三）評議員會開催に關する事務

（四）東郷實氏衆議院議員當選祝賀記念品贈呈に關する事務

（五）本年度定期總會開催に關する事務

二、集會

（一）五年五月二十三日、母校山根助教授及新入會員の歡迎會を川端町紀州庵に開催す出席者一十八名

三、支會入會

加茂　巖氏（昭三、農）　臺北帝大理農學部へ着任

箕輪　重胤氏（昭五、生）　臺北帝大理農學部へ着任

横畑　護氏（昭二、經）　宜蘭農林學校へ着任

茶谷　太郎氏（昭三、農）　嘉義農林學校へ着任

近藤　卷藏氏（昭五、農）　臺南州新營郡烏樹林明治製糖所へ着任

佐々木　欽也氏（昭五、生）　中央研究所農業部嘉義試驗支所へ着任

眞鍋　雅彦氏（昭五、畜）　中央研究所農業部へ着任

市島　吉太郎氏（大四、農）　臺北帝大理農學部へ着任

四、支會脫會

河村精八氏、佐々木元夫氏、坂本英三郎氏、芝轍一郎氏離臺につき脫會

五、會員現在數（十二月二十四日現在）

臺北州管內　六六名　臺南州管內　二七名　新竹州管內二　名　高雄州管內　七　名

臺中州管內　一二名　合計　一一四名

卒業生府縣別人員調

（昭和五年十月末日現在）

府縣	人員
朝鮮	四六
臺灣	一一三
樺太	三三
南洋	五
滿洲、支那	五九
海外	二七
北海道	四三七
東京府	三〇
神奈川	二〇
埼玉	一二
群馬	七
千葉	二四
栃木	八
茨木	六
宮城	三三
福島	一一
岩手	三三
青森	三三
山形	五
秋田	二四
新潟	一八
愛知	二
靜岡	三
山梨	四
岐阜	一四
長野	二〇
福井	三
石川	五
富山	二
京都	三三
大阪	二七
兵庫	四二
奈良	五
三重	一三
滋賀	二
和歌山	九
鳥取	一五
島根	四
岡山	三
廣島	一〇
山口	七
德島	四
香川	八
愛媛	一八
高知	八
長崎	三
福岡	三
大分	六
佐賀	三
熊本	二〇
宮崎	八
鹿兒島	八
沖繩	五
印度	二
不詳	九
計	一、五五四

會員住所異動

（昭和六年二月末日迄ノ分）

氏名	住所
阪東 胖（昭四、化）（舊姓水澤）	兵庫縣多喜郡日置村八上新
米澤虎太郎（四一、化）	鳥取市上町七五
半澤耕貫（大一一、經）	東京下谷區上野櫻木町二三　（歸朝）
原田英一（昭四、經）	函館市船見町一一〇田中敬吉方　（農林主事補渡島支廳勤務）
廣田 實（大一一、林）	野付牛營林區署長
井ノ口靜雄（大一〇、林）	札幌市北十四條西三丁目　（北海道廳技師林務課勤務）
石川貞治（二〇）	東京市外中野町住吉三　（字番地改正）
伊藤秀五郎（昭四、生）	札幌市北十二條西三丁目文化アパート內
伊藤祐夫（三三、畜）	長野市縣町日本勸業銀行長野支店內
今井源四郎（昭三、畜二）	東京市外荏原郡大井町元芝六五九
加藤茂雄（大三、農）	東京市外荏原町中延大原北一、一一六
加藤 浩（大二、畜一）	臺灣臺北帝國大學理農學部內
桑野直澄（昭三、農）	臺灣臺北州宜蘭農林學校官舍
金原善知（大三、林）	東京市麻布區本村町二二五ノ八　（訂正）
近藤治義（大一四、經）	小樽市稻穗町八丁目日本基督教會
近藤七郎（四五、經）	東京市四谷區南伊賀町三六　（歸朝）

東京市外千駄ヶ谷町五二六　久保隆三（三四、農）
靜岡市水落町一丁目恩田正義方（靜岡縣農林主事縣廳農務課勤務）　桑城勝三郎（四五、農）
京都市上京區小山花木町四八ノ七　益田健三（昭五、農）
1711. Ward Str. Berkley Cal. U. S. A.　松岡亮作（四四、農）
松山市魚町二丁目高知屋旅館　西田常一（昭二、農）
京都市上京區紫竹初春町七七　森本豐種（昭五、農）
千葉縣印旛郡佐倉町新町　大木金二（大一二、農）
東京市外中野町昭和通二丁目七（字地番改正）　小野常治（二五、工）
德島縣立農業學校長　坂田保喜（大二、農）
Fazenda Bastos Caixa Postal 93
Est. Rancharia L. Sorocabana Brasil　高柳武七郎（大一四、農）
東京市外豐多摩郡杉並町天沼四二一（農林省畜產課勤務）　鶴田祥平（大一五、畜）
東京市外中野町昭和通三丁目五三（字地番改正）　湯地定彦（三一、農）
同　前　湯地定武（三八、畜）
札幌市南八西四ノ二八八（帝室林野局札幌支局囑託）　山野義雄（昭三、生）

會員死亡者

昭和五年　特待會員　渡邊又次郎君　會員　和田太吉君（二二）
中根明君（一五）　山下敬太郎君（一七）
昭和六年　鈴木導君（三八化）　成田貞治君（三八農）

廣告

一、昭和五年分及六年前半期分地方會員會費金參圓也は昨秋振替集金郵便にて集金致しましたが、其以前の未納の分は振替口座（小樽一〇四二四番）を利用して御拂込を願ひます。

一、準會員の會費は振替口座により御拂込を願ひます。

一、會則第二十二條により會費を一時金を以て納入する方法がありますから御利用下さい。但し右は從來納めた會費には關係ありません。

會計幹事

一、會員二三氏より昨年末發行の卒業生住所錄は、不便の點多きを以て從來の如きものに改むることの希望がありました。本年は熟考の上從前の如きものに改むることを北大本部に希望するか或は同窓會單獨にて從來通りの名簿を作成配付したいとも思ひます。報告の發行日は總會後の今日頃が適當と思はれますが御希望もあらば御申越下さい。

庶務幹事

札幌同窓會規則

第一條　本會ハ札幌同窓會ト稱ス

第二條　本會ノ目的ハ左ノ如シ

一　會員ノ友情ヲ溫メ親睦ヲ期スルコト

一　北海道帝國大學ノ隆盛ヲ圖ルコト

第三條　本會ヲ札幌市北八條西五丁目ニ置キ支會ヲ東京其他便宜ノ地ニ置ク

第四條　本會ハ舊札幌農學校、東北帝國大學舊農科大學、北海道帝國大學舊農科大學及北海道帝國大學農學部卒業生ヨリ成立スルモノトス

第五條　札幌市及ビ札幌郡在住者ヲ札幌會員トシ其他ニ居住スルモノヲ地方會員トス

第六條　本會ニ名譽會員ヲ置ク名譽會員ハ舊札幌農學校、東北帝國大學舊農科大學及北海道帝國大學ニ功勞アル者ヲ總會ニ於テ推薦ス

但會務ニ關係ヲ有セザルモノトス

第七條　本會ニ特待會員ヲ置ク特待會員ハ左ノ範圍內ヨリ評議員會ニ於テ特選ス

一　北海道帝國大學ノ職員

一　舊札幌農學校、東北帝國大學舊農科大學及北海道帝國大學ノ職員タリシモノ

但會務ニ關係ヲ有セザルモノトス

第八條　本會ニ準會員ヲ置ク東北帝國大學舊農科大學、北海道帝國大學及北海道帝國大學農學部全科選科ヲ修了シタルモノハ準會員トナルコトヲ得

但會務ニ關係ヲ有セサルモノトス

第九條　本會ニ役員及ビ評議員ヲ置ク役員ハ會長一名、幹事二名トシ評議員ハ十名トス

但各役員ハ專任トス

第十條　本會役員及ビ評議員ハ每年一月定期總會ニ於テ選擧ス役員ハ任期ヲ一ケ年トシ再選スルコトヲ得評議員ハ任期ヲ二ケ年トシ每年其半數ヲ改選スルモノトス

第十一條　本會役員及ビ評議員ハ札幌會員全體ヨリ選擧スルモノトス

第十二條　當選評議員ハ互選ヲ以テ評議員長ヲ定ムルモノトス

第十三條　會長ハ本會全體ノ事務ヲ總理シ總會ノ時ハ是ガ議長タルモノトス

第十四條　幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケ庶務、會計事務ヲ分掌シ會長事故アルトキハ年長幹事之ヲ代理スルモノトス（昭和六年總會ニ於テ改正）

第十五條　會長ハ會務ノ都合ニヨリ書記及小使ヲ雇入ル、事ヲ得

第十六條　會長ハ本會ニ屬スル一切ノ財産ヲ管理シ公ニ對シテ本會ヲ代表シ本會財産ノ所有主タル資格ヲ有ス

第十七條　評議員ハ本會ノ豫算決算及臨時重要事件ニ就キ會議評決ノ任ニ當ルモノトス

第十八條　本會ニ名譽會長ヲ置クコトヲ得名譽會長ハ本會ニ功勞アル者ヲ總會ニ於テ推薦ス

第十九條　本會ハ毎年一月定期總會ヲ開キ前年中會務ノ成績ヲ報告シ役員及評議員改選ヲ執行スルモノトス

第二十條　臨時總會ハ左ノ場合ニ開會ス

一　會長ノ必要ト認メタル時

一　評議員ヨリ請求アリタル時

一　會員十名以上ノ請求アリタル時

第二十一條　總會ノ決議ハ札幌會員出席者ノ三分ノ二以上ニヨリ決シタルモノニアラザレバ効力ナキモノトス

第二十二條　會員ハ本會維持資金ノ外倶樂部維持費トシテ一ケ年金壹圓六拾錢宛ヲ納ムルモノトス札幌會員ハ本會維持資金トシテ各自一ケ年金貳圓又ハ一時金貳拾圓ヲ納ムルモノトス

但維持會員ハ毎年一月ヨリ之ヲ納ムルモノトス

第二十三條　准會員ハ會費トシテ各自毎年金壹圓ヲ納ムルモノトス

第二十四條　本會ハ毎年二回定時ニ報告ヲ印刷シ全會員ニ配布スルモノトス

第二十五條　會員住所移轉其他異動アル時ハ其都度本會ニ通知スルモノトス

但支會々員ノ異動ハ支會幹事ヨリ本會ニ通知スルモノトス

第二十六條　會員ニシテ本會ノ名譽ヲ毀損スルノ行爲アルトキハ總會ノ決議ヲ經テ除名スルコトアルヘシ

第二十七條　本規則ハ札幌會員出席者ノ三分ノ二以上ノ合意ヲ以テ改正增補スルコトヲ得

第二十八條　本會ノ事務ニ係ル細則ハ評議員會ニ於テ之ヲ定ム

附則

第二十九條　本會ニ書籍、新聞紙其他必要ナル器具ヲ備ヘ會員相互ノ集會、談話、從覧ノ便ニ供ス

第三十條　支會規則ハ支會ニ於テ便宜之ヲ設クルモノトス

昭和三年三月廿日發行

編輯兼發行者　北海道帝國大學農學部農業經濟學教室內　渡邊侃

發行所　札幌市北八條西五丁目　札幌同窓會
振替貯金口座一〇四二四番

印刷有　札幌市北一條西三丁目二番地　合名會社文榮堂印刷所支配人　大谷木茂

印刷所　札幌市北一條西三丁目二番地　文榮堂印刷所
電話百六十番・八百五十一番